

保存

創立20周年記念特別展

郷土の人脈

解説総目録



10.15~11.14

蘇我天皇記念標建設広告より

SPECIAL EXHIBITION

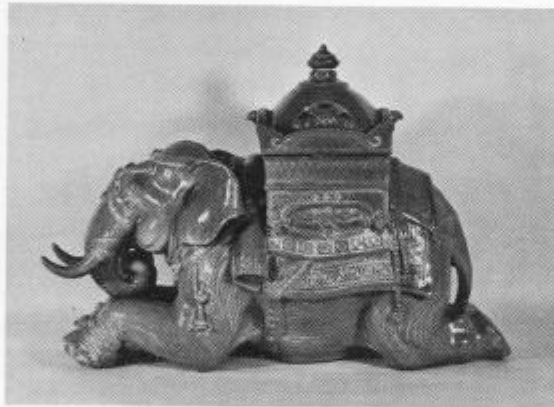
PEOPLE OF OUR NATIVE PLACE

1
0

創立20周年特別展

郷土の人脈

解説総目録



179 沼田一雅作 象香炉

昭和47年10月

福井市立郷土歴史博物館編

はじめに

福井県の歴史は古く若狭の山々も越前の水も、われ等郷土の先人の遺した業績の馥郁たる香りに満ち満ちてをり、就中、幕末維新の危局に際して最も光彩を放つてをります。

温故知新。これ等先人の偉業を偲んで、その研鑽努力を認識し、碩学の気風に接しては、その学恩に感謝することは、我々現代に生を享けた者の責務であり、人としての道でもあります。

幸いにして、創立以来歩んできました二十年間に、当館は二百名近い郷土人物の遺墨、遺品類を収蔵するの成果を挙げ得ましたので、この度の創立二十周年記念特別展に於きましては、これ等を数多く展示して、皆様方に郷土若越の生んだ諸先人を偲んで頂かうとするものでありますが、それを特別展開催期間だけに留めるのは余りにも惜しくありますので、後日、何時如何なる時に於ても先人を偲び得る様、本解説目録を作成し、後世に遺さうとする次第であります。

この目録が、右目的を果すと同時に、故人の筆跡と略伝に関する参考資料となつて、郷土史愛好者、研究者の御役に立てば、館員一同望外の喜びとする所であります。

昭和四十七年十月十四日

福井市立郷土歴史博物館

館長 松 平 永 芳

凡 例

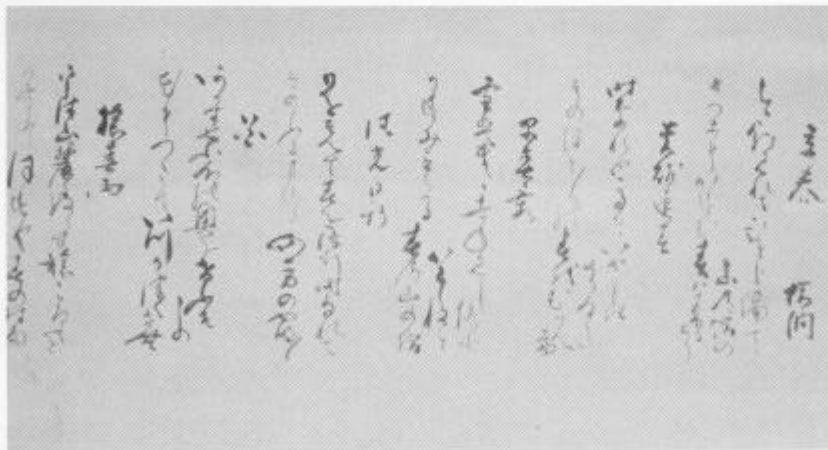
- 一、本書は昭和四十七年十月十五日より十一月十四日までを会期とする、創立二十周年記念特別展「郷土の人脈」の解説目録である。
- 一、本目録は前半部に主要展示史料の写真を収め、後半部には展示人物を「天皇」「藩主」「武人」「政治家」など十五部門に分類して、それぞれの人物の遺墨遺品を原則として陳列の順に従って収録解説してある。
- 一、それぞれの史料に付した「史料通し番号」は、本目録内に関する限り図版(写真)番号、列品題簽ともすべて共通している。
- 一、本展観では、一応時代を明治初期までに限定しているが、例外として若干昭和年間の人物をも収録してある。但し、すべて故人であることにはかわりはない。
- 一、所蔵者中「春文」とあるのは「福井市春嶽公記念文庫」の略である。また、時に支障もあるので、寄託者芳名はすべて省略させていただいた。
- 一、会期中、本目録中の史料の展示換えや、目録以外の史料を展示することもある。



4 結城秀康書幅

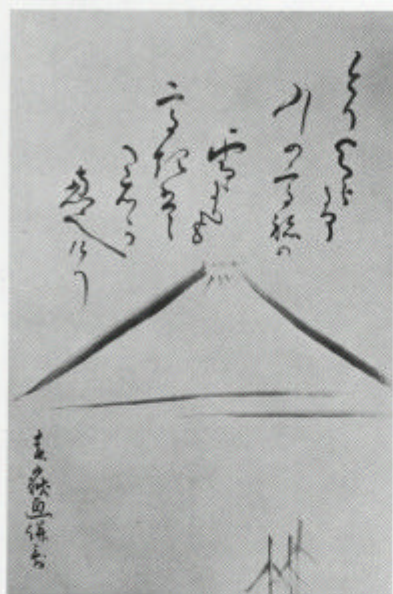


9 清照院筆。経文観世音菩薩像



10 松平宗矩和歌幅

17 松平慶永 富士の画並びに讀



16 松榮院 和歌幅



20 松平茂昭 扁額



21 松平幸子「九十賀和歌」折本

常娛閑適致川源春色從花
 官賞隨可非只平述浪食
 有善多至一上清時

22 問部詮勝書幅

楊柳長齊從戶暗櫻飛
 爛熟滴階台松齊

23 問部詮実書幅

歌管聲停月已低花深
 人靜九重閨巫山夢恨天
 明早一轉流鶯御柳西

24 小笠原長守書幅

貴涼如蔭坐於床東近
 三丈天名案此月比既
 好清熱不夫重為の酒衣家

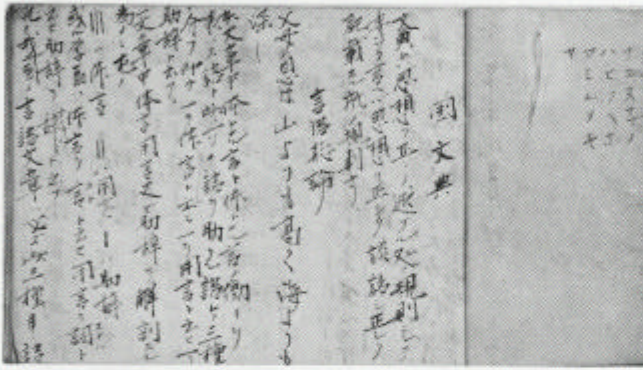
27 本多副元書幅



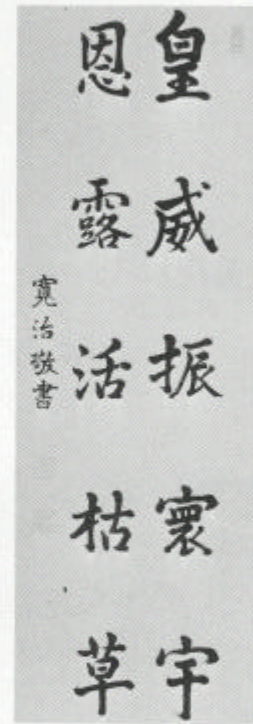
25 松平昌勝 茄子の画幅



29 伝 真田幸村所用 采配



34 佐久間勉筆写本



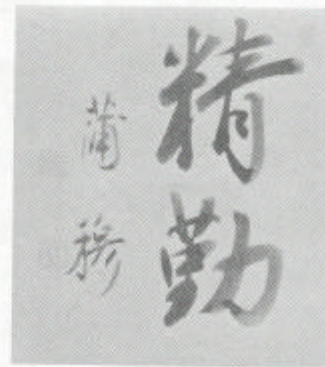
35 加藤寛治書幅



36 岡田啓介 扇額



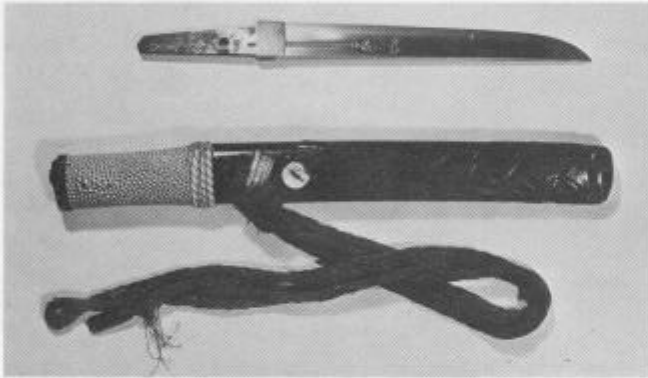
38 長谷川清拝受 功一級金鷄勲章並びに勲記



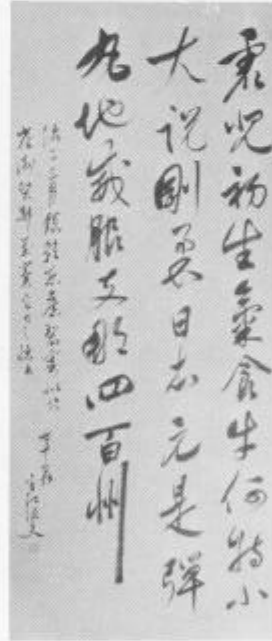
37 蒲務 色紙



42 鈴木主税書翰



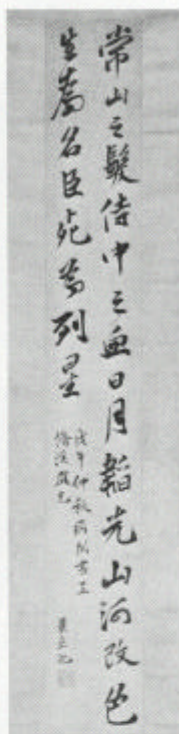
44 中根雪江所用短刀



43 中根雪江書幅



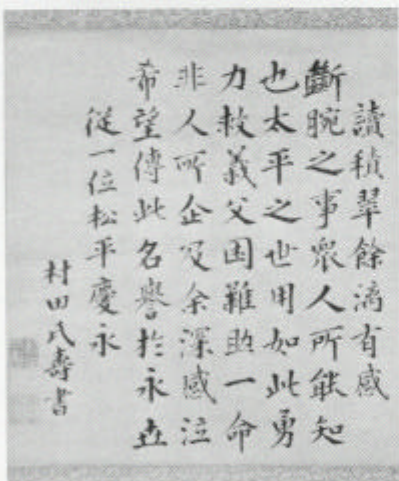
44 中根雪江拝領 天賜印籠



49 橋本左内自筆覚書類



51 村田氏壽書幅

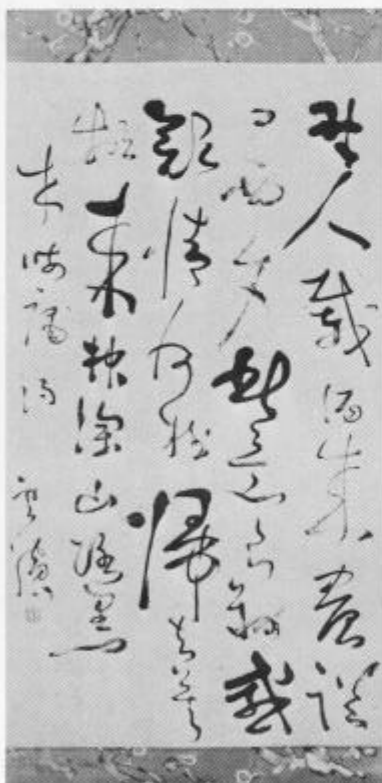
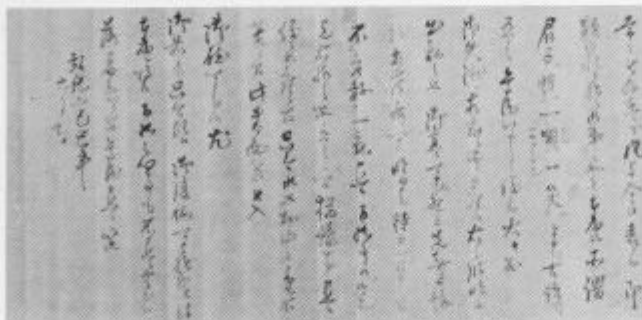


56 酒井十之丞日記

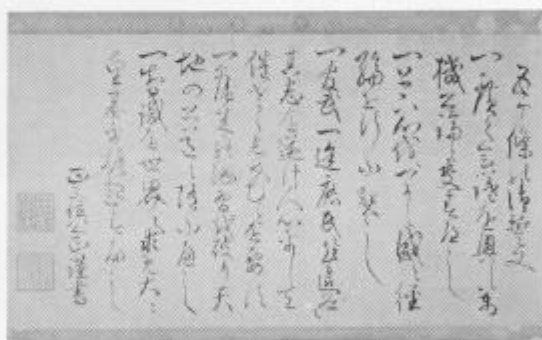




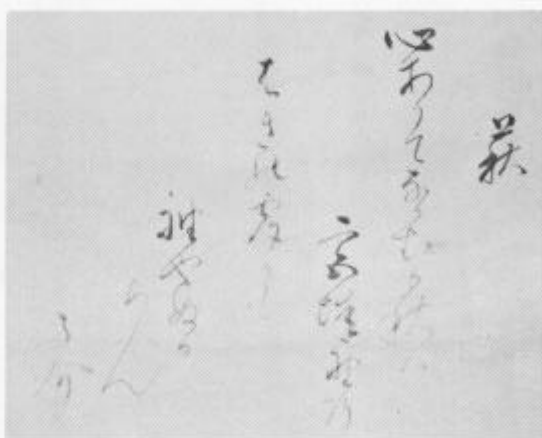
57 浅井 八百里 書翰



65 梅田雲浜書幅



60 由利公正書幅



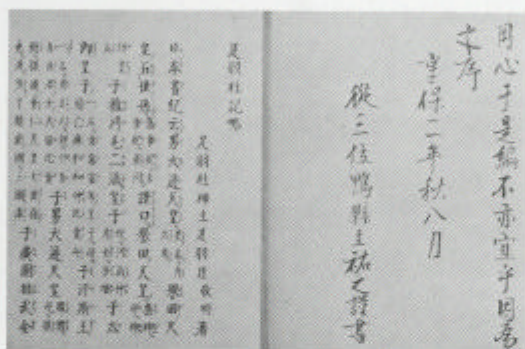
63 近藤了介和歌幅



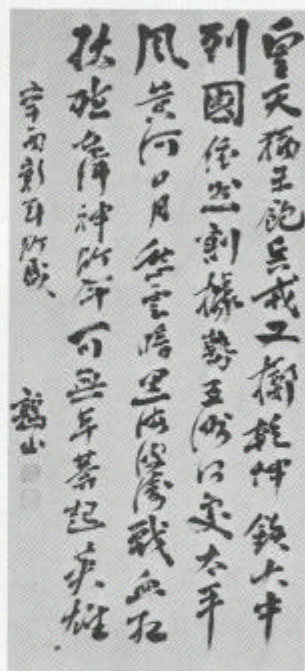
67 山本条太郎 色紙



66 鈴木準道 市務日誌



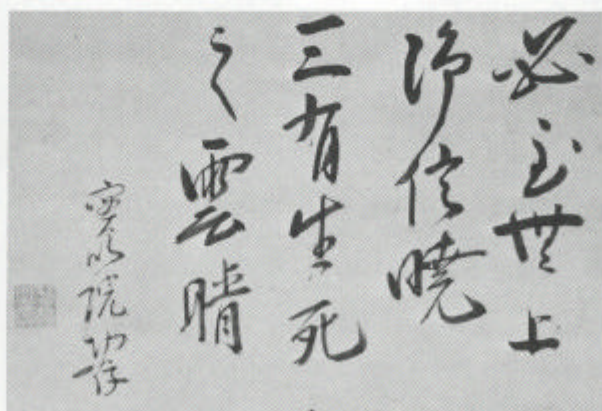
70 足羽敬明筆「足羽社略縁起」



68 杉田定一 書幅



73 鎌倉寺良雄書幅



72 平乗寺巧存書幅

撞破人骨骨鐘三
 分外清請系之月
 在此老松桐
 子山史

佛王耳
 而獨悲
 性已種
 之不疎
 知來者
 之可追
 實速染
 其未遠
 免合是
 而唯非
 舟搖之
 以輕颺
 風飄之
 惟已種
 而獨悲
 性已種
 而獨悲
 性已種

風飄之
 而唯非
 舟搖之
 以輕颺
 風飄之
 惟已種
 而獨悲
 性已種
 之不疎
 知來者
 之可追
 實速染
 其未遠
 免合是
 而唯非
 舟搖之
 以輕颺
 風飄之

風飄之
 而唯非
 舟搖之
 以輕颺
 風飄之
 惟已種
 而獨悲
 性已種
 之不疎
 知來者
 之可追
 實速染
 其未遠
 免合是
 而唯非
 舟搖之
 以輕颺
 風飄之

75 滝谷寺道雅遺墨折本

家住夕陽江上却一灣
 心水長流門
 後耳松樹高於屋
 信与吾在卷
 子孫 十八年言心

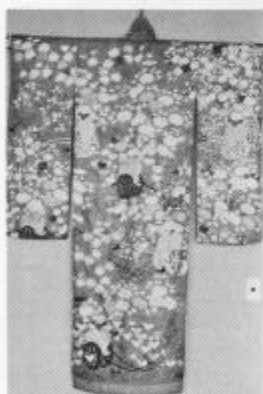
77 青藤雪鴻書幅

你淨身形似鶴形于珠松
 下一函徑我來問道無修說
 雲在青天水在瓶 雪鴻

79 望月信亨書幅

南無阿彌陀佛
 淨工(一)大德正基

81 松平慶永室勇姬所用和服



清都衆木總榮芬傳道孤松
 最出群石接天庭多景色氣
 連宮闕借氤氳懋進的傳華
 嘉偃蓋重拂瑞雲不惜法骨
 助少鼎鎮得相新泰明君

半井仲尚
 洋學洋風尚風成之開
 新秋亦奇麗心神何及
 著時壯美少且能令
 心緒九國雲山四并龍
 中妙桐海入勝清水仙
 休芒澤言同拱共於八
 祝太平
 赤馬岡居松平味 井保

84 半井南陽 色紙

此在依主命國祥
 持越の并産を為奉
 少之居本今分月之志
 國家に勉勵の志を
 以上
 松原白翁
 以上原良定
 大正十一年
 二月十日
 大正十一年
 二月十日
 日野三氏
 轉方洪居處

87 笠原白翁 書翰



皇太子殿下臨
 一銀瓶 定例
 右奉令親覽御覽
 賜筆字為御覽事未
 謝書御覽也
 明治三十四年 梅本綱常
 福田源三郎殿
 持筆者松原白翁
 大正十一年
 二月十日
 此在依主命國祥
 持越の并産を為奉
 少之居本今分月之志
 國家に勉勵の志を
 以上

88 風月三昆面銀瓶並びに橋本綱常添状

大正男統 國 啓

89 岩佐純書幅



91 八田善之進 扁額

一溪雲湧處茅屋靠幽林
 樹陰石巖密
 泉曲難往深濯纓初肆
 意披卷自怡心
 我道真源遠居溪太古琴

丁卯六月六日
 龍軒

90 土肥慶藏書幅



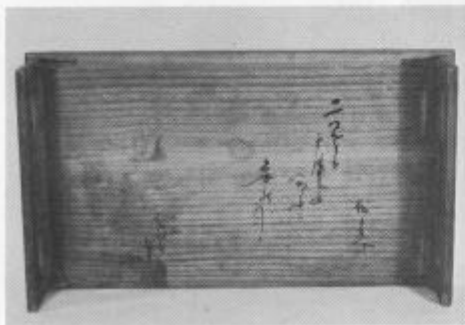
94 橘曙覧肖像画

あつたての力に
 幾多の
 色あふる

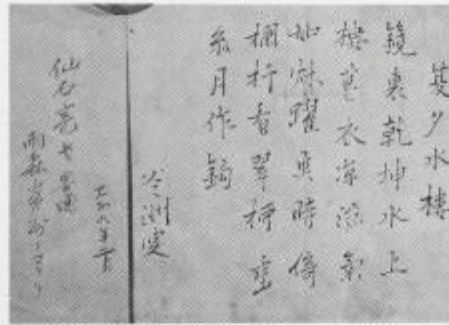
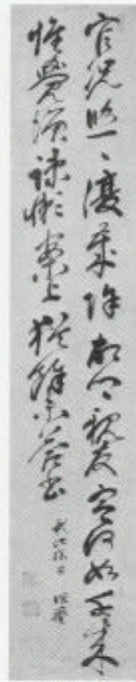
93 橘曙覧和歌幅

公不
 紅葉の
 色あふる

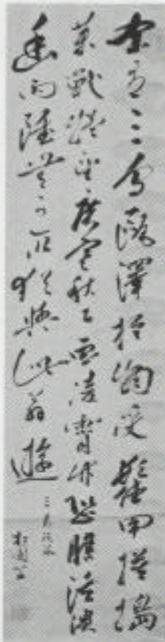
92 證誠寺東溪和歌幅



97 南越獅子林分社相伝「文台」



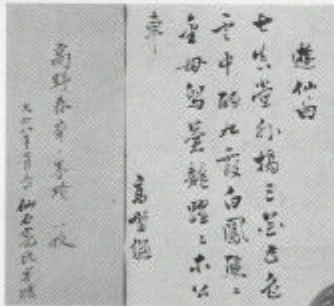
100 雨森炎洲書幅



101 力丸東山書幅



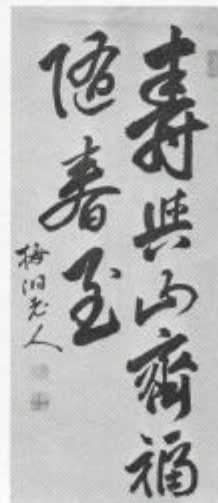
102 井上翼章和歌短冊



106 高野春華書幅



103 前田雲洞書幅



104 前田梅洞書幅

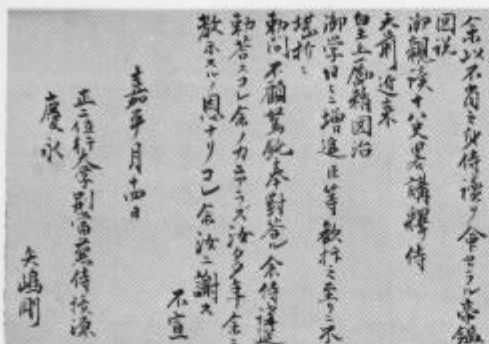
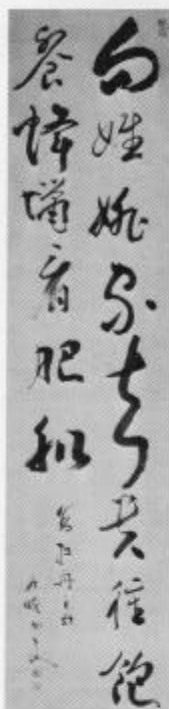


107 高野真奇扁額

111 蒔田雲處画幅

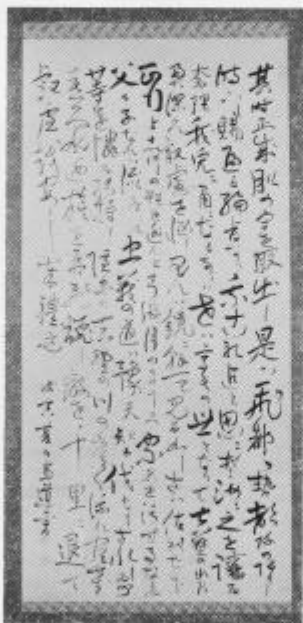


106 片山蘭女書幅



112 松平慶永書翰

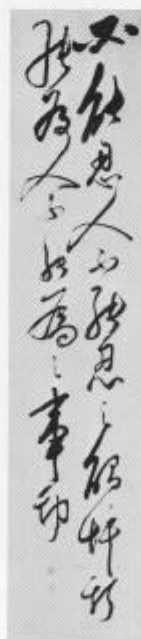
117 広部鳥道書幅



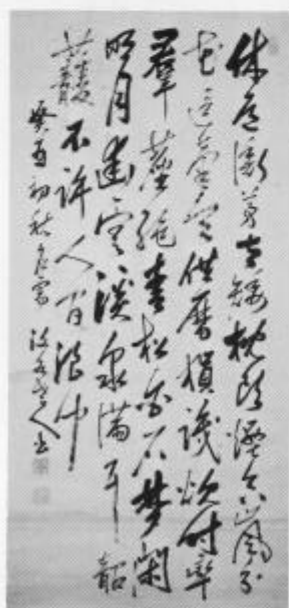
114 拓植竹塙画幅



115 吉田東草書幅



118 荒川汶水書幅



野莽郊居練有規制茅亭草舍
棘垣柳籬構列齋方淡宕如畫
花間紅白獨行款猶徜徉洒落何
異僊居 丙子秋分前一日 河野荳洲

120 三國曲眼書幅

柳上臨流面水
寫我志風標
夜影孤遠伸

130 瓜生寅書幅

珠玉貝闌結在錦華髮蒼蒼一釣
竿天地觀身都是蒼浪在石上林
空 臨覺林 梅柳於瓜生寅

長淳書翰
一、五月廿一日
二、五月廿一日
三、五月廿一日
四、五月廿一日
五、五月廿一日
六、五月廿一日
七、五月廿一日
八、五月廿一日
九、五月廿一日
十、五月廿一日

124 佐々木長淳書翰

送志新
志新書詞
龍天波所
新極
志新書詞

123 富田鷗波書幅

月夜
起早
月夜
起早

140 西脇吳石書額



144 狩野了章 群禽図の屏風(部分)



143 狩野元昭画幅



147 中村西溪画幅



146 市川徳行画幅

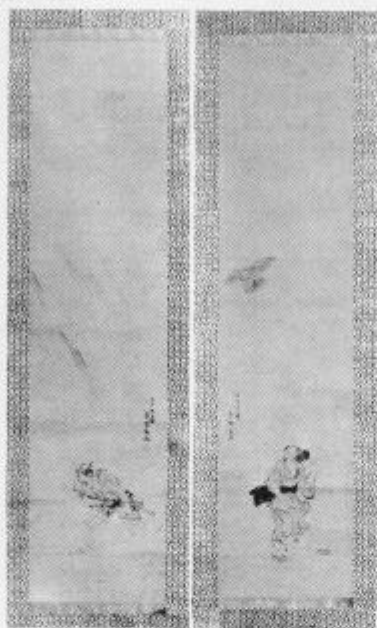


145 岡部南嶽画幅

150 今立春山画



151 高昌夢蝶画幅



154 石垣東山画幅



152 川地柯亭画幅



153 須子熊石画幅



156 島田雪谷画幅



156 島田雪湖画幅



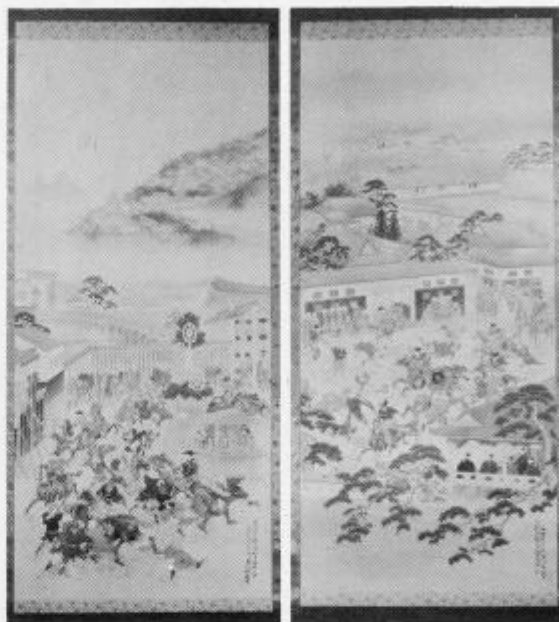
168 吉田文山画額



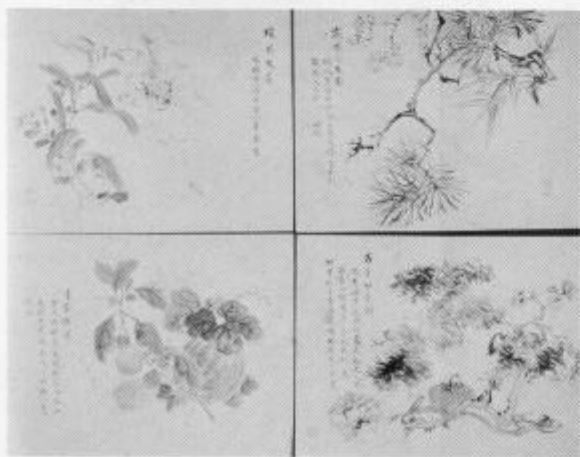
157 島田墨仙画幅



159 平林清輝画幅



158 菱川師福画幅



163 河野菱渚 謎語淡彩画帖



160 西尾土萌画額

162 早瀬来山画幅



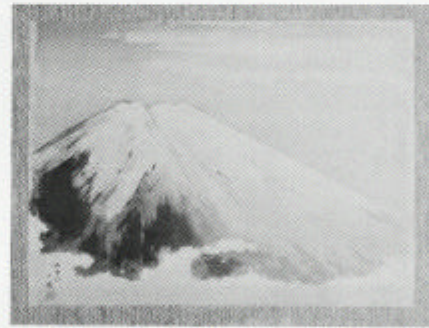
164 山田介堂画幅



165 内海吉堂画幅



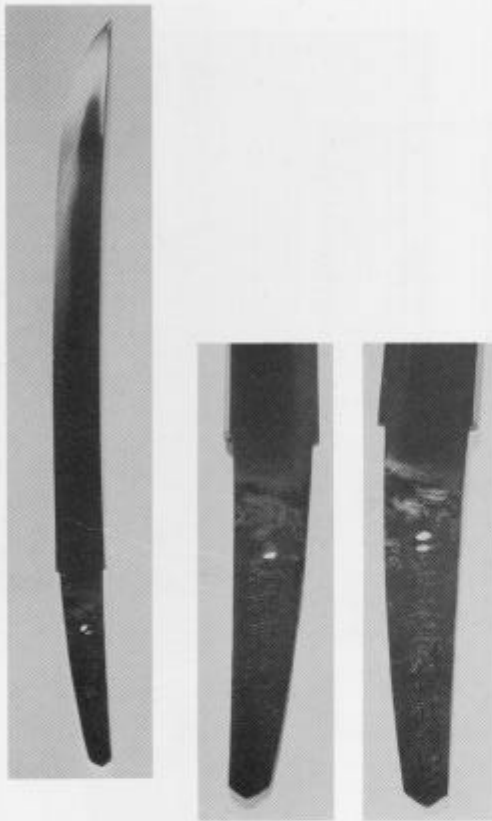
166 長田雲堂画幅



167 悟雪堂大機画額

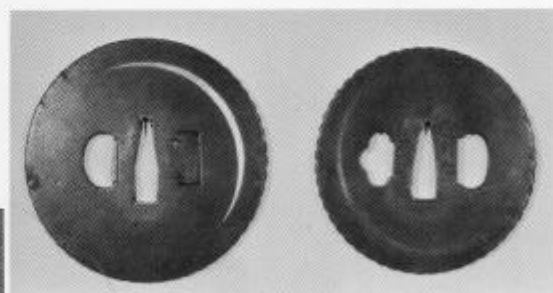
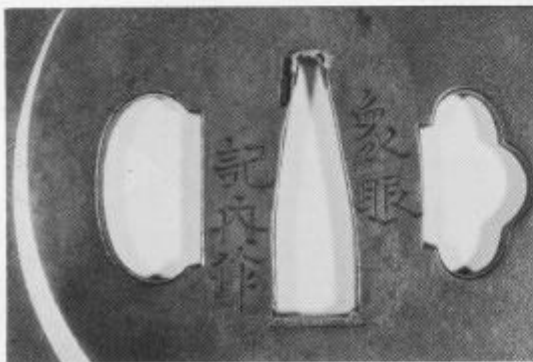


169 森由太郎画額

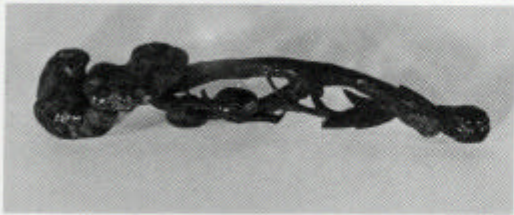


171 初代康繼 脇差

175 明珍吉久魚鱗具足

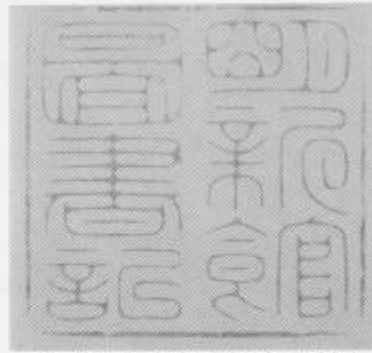
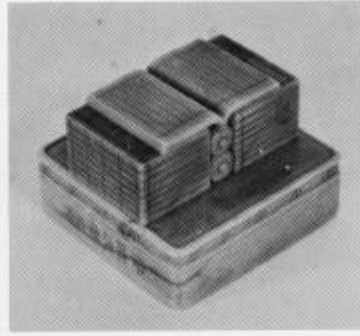
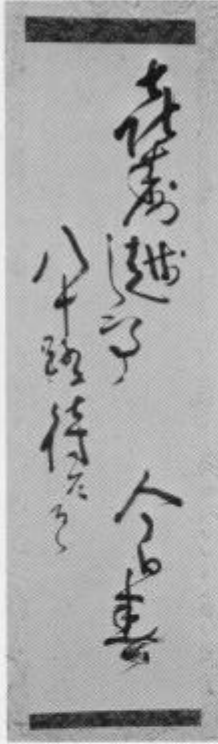


177 高橋記内作
松平慶永佩刀鐙

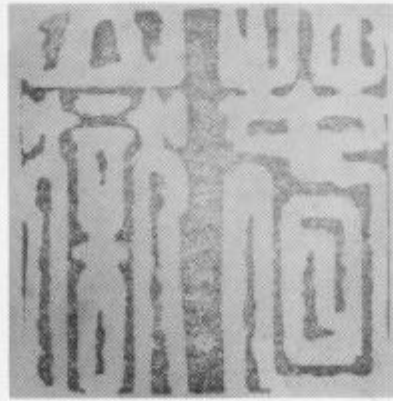
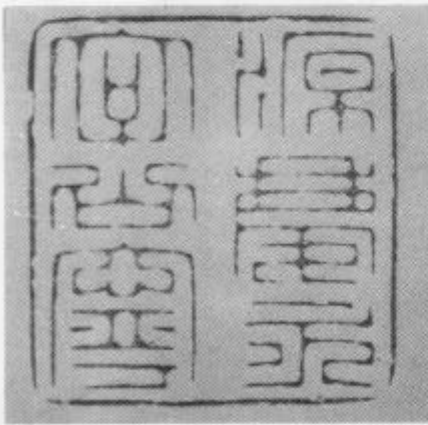


178 島雪齋作
松平慶永所用文具類

182
岩野茂山書幅



180 河崎致高刻「明新館図書記」



181 河崎致高刻 松平慶永落款印

創立二十周年記念特別展

「郷土の人脈」

解説総目録

〔天皇〕

① 継體天皇

第十五代応神天皇より数えて五代の孫。第二十五代武烈天皇が崩御された時御嗣子がなく、当時三國坂中井（今の三國町）におられた。男大迹王が迎えられて第二十六代継體天皇として即位された。

継體天皇は、記録によると、西暦四五〇年のご誕生といわれ、即位されるまで五十年間越前におられたと伝えられ、その間に治水開墾などの事業に功があつたと言ひ伝えられている。継體天皇は三國神社、日野神社、岡太神社等数カ所の式内社（九二七年成立の延喜式に名の見える神社）にまつられている。西暦五三一年に崩御された。

1 玉穗宮天皇御世系碑原本

天保八年（一八三七）六月。田中大秀撰・筆 一幅

2 建碑由来記

弘化三年（一八四六）正月。田中大秀撰・筆 一幅

3 継體天皇御系

天保十一年（一八四〇）正月。田中大秀撰・筆 一幅

以上三点本館蔵

〔藩主〕

福井藩

② 結城秀康（福井初代藩主）

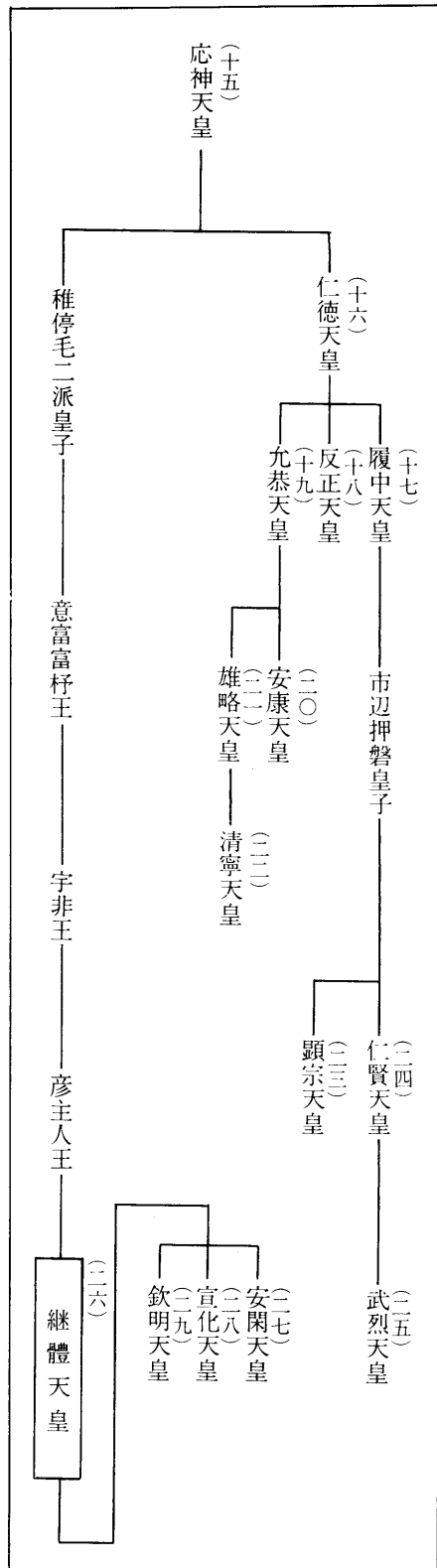
徳川家康の二男として、天正二年（一五七四）に生まれる。同十一年、小牧長久手の戦の後、豊臣秀吉の養子となり、更に同十八年下野国結城（茨城県結城市）の名門結城晴朝の養子となつて、結城十萬石も相続し結城宰相と称した。

慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原の合戦に、秀康は下野国小山（栃木県）に布陣して上杉景勝に備え、その功によつて、一躍越前六十八万石の大大名に任ぜられ、翌年北ノ庄（福井市）に入城、柴田勝家以来の北ノ庄城を大幅に改築して規模を拡張すると共に、城下町を修築し、名ある武将を始め一芸一能あるものを広く天下に求め優遇し、類を見ない雄藩を作り上げたが、慶長十二年（一六〇七）、三十四歳で歿した。

秀康に対しては、諸大名も弟の身で二代將軍となつた秀忠に對すると同等の礼をとつて畏服し、秀忠將軍も特別の厚遇をもつてのぞんだので、越前家は他の大名とは別格の扱いをうけ、「御制外の家」と呼ばれるに至つた。

4 書 幅

寄託品 一幅



③松平忠直 (福井二代藩主)

藩祖結城秀康の長子。文祿四年(一五九五)に生まれ、慶長十二年(一六〇七)十三才で藩主となる。慶長十九年同二十年の大阪冬、夏の陣には越前藩兵、凡そ一万五千を率いて参戦。ことに夏の陣では大阪城一番乗りの功名をたてた。また当時、荒涼とした原野であった鳥羽野(現鯖江市神明地区)の開拓を進め開拓民の諸税を免除するなど、仁政を施したが、その後不祥事が続き、ついに元和九年(一六二三)二十九歳の時、幕命によって、豊後国(大分県)萩原に流され、二十七年後五十六歳をもって同国津守で歿した。菊地寛の小説「忠直卿行状記」は後世の言い伝えを元にしたに過ぎず、忠直に関する正確な史料は発見されていない。従って豊後送りの真因も不明のままである。

④松平光通 (福井四代藩主)

寛永十三年(一六三六)福井三代藩主松平忠昌の嫡子として生まれ、正保二年(一六四五)父の逝去の後、四代藩主となる。光通は、家中定十六ヶ條、保民の規定三ヶ條・寺院造作制限令六ヶ條など諸制度を發布し、藩の内政を充実させると共に、文教にも力を尽し、京都より儒医伊藤坦庵を招いて藩士の教育にあたらせ向学の気風を養わせると共に、名僧大愚禪師を招請して大安寺を建立。

また、万治三年(一六六〇)新田義貞の戦没地に新田塚を建立するなど士風の高揚にもつとめた。

一方、寛文九年(一六六九)の大火で天守閣を始め福井城の過半は焼失し、以後天守閣は再建されなかった。

光通の施政は、温順にして慈愛に満ち領内の崇敬を集めたが、延宝二年(一六七四)三十九歳の時、突然自刃したと伝えられている。

阿部信一氏贈

5松平忠直宛行状

中根孫右衛門宛。慶長十五年(一六一〇)四月十六日付。
元和八年(一六二二)十二月二十三日付。

6和歌短冊

春 文 一枚

7 松平光通朱印状並びに朱印地絵図

一通

金屋七兵衛宛。寛文十二年（一六七二）三月付。

寄託品

⑤ 松平昌親（福井五代藩主）

寛永十七年（一六四〇）福井三代藩主忠昌の末子として福井に生まれる。父の逝去後、吉江（鯖江）に二万五千石の分封をうけ、吉江居館を構えたが、延宝二年（一六七四）四代藩主光通（兄）の遺言により福井五代藩主となった。

しかし、光通には子直堅があり、松岡には光通の庶兄昌勝がいて、昌親の相続は順位をみだすものとして藩内に動揺があった。

そのため昌親は、まもなく兄昌勝の子綱昌を養子とし、延宝四年（一六七六）在職二年にして隠居した。

後を受けて六代藩主となった綱昌は、悪病のため政務を見ることが不可能となり、これが幕府の忌むところとなって、貞享三年（一六八六）綱昌は蟄居を命ぜられ、藩領は半減して二十五万石となった。これを「貞享の大法」と言う。

一旦隠居していた昌親は、幕命により再び藩主（七代）の座にもどり、吉品と改名して、減封後の藩政立直しに努力し、正徳元年（一七一）七十二歳で歿した。

8 松平昌親朱印状

一通

金屋七兵衛宛。延宝五年（一六七七）十二月付。

寄託品

⑥ 清照院

父は飛鳥井中将雅直（公家）、母は福井三代藩主松平忠昌の女。寛文五年（一六六五）福井六代藩主松平綱昌と婚約、のち内室となり、正徳二年（一七一）五十一才で歿した。

9 経文親世音菩薩像

一幅

桑山岩雄氏贈

⑦ 松平宗矩（福井十代藩主）

正徳五年（一七一五）、福井藩祖秀康の曾孫松平知清の子として江戸に生まれ、九代藩主宗昌の養子となり、宗昌の逝去後、享保九年（一七二四）十代藩主となる。

宗矩の在任中、領内には火災、風水害などが続出し、飢饉が相次いで藩財政は窮乏した。飢饉に苦しむ細民が城下を群行して（緞虫・衰虫などと称した）動揺したが、宗矩は家中領民に儉約令を発して貯蓄を奨励し、藩米を放出して餓死者の出るのを防ぐなど懸命に対策を講じ、名君として伝えられている。「徳正君御出語」は、そのすぐれた行状を記録したものである。寛延二年（一七四九）、三十五歳で歿した。

10 和歌幅

一幅

春文

11 桑山十兵衛宛、幼時書翰

三通

これらの自筆書翰は、福井藩士桑山家に伝えられたもので、享保十一年（一七二六）十二月、十二歳で元服する以前、幼名千次郎時代に書かれたものと思われる。

桑山岩男氏贈

⑧ 松平治好（福井十三代藩主）

明和五年（一七六八）福井十二代藩主重富の子として江戸に生まれ、寛政十一年（一七九九）家督を相続し、十三代藩主となる。

文化元年（一八〇四）、藩医達の申請した医学研究所の設立を許可し、同六年には土居の内に敷地を与えて開館させ、薬草園を併設した、これが濟世館で、幕末全国にその水準を誇った福

井の医学興隆の基礎となったものである。一方では、相次ぐ城下での大火、江戸藩邸の類焼などと相まって、藩財政は次第に窮乏し、また、福井市太田の平乗寺功存の著「願生婦命弁」から端を発した西本願寺宗意騒動など城下の擾乱も少なくなき、その在任中は多難であった。

文政八年（一八二五）五十八歳で歿した。

12書 幅

春 文 一幅

⑨麗照院

田安中納言宗武の女。天明七年（一七八七）福井十三代藩主松平治好の内室となり、文化九年（一八一二）四十二歳で歿した。

父田安宗武は、八代將軍徳川吉宗の次男、御三卿の一つ田安家の初代であり、国学者で歌人として有名である。

13麗照院手沢「香盆」

一点

14麗照院手沢「歌書」

七冊

百人一首古説・曾禰子忠家集全・李花集全・松記・山家記・大原記・源三位頼政家集全・忠度詠歌・加満皇羅家集全

以上二件春文

⑩松栄院

十一代將軍徳川家斉の女。享和三年（一八〇三）江戸城内に生れ、文政二年（一八一九）福井十四代藩主松平斉承の内室となり、安政四年（一八五七）五十四歳で歿した。

15松栄院手沢品類

十点

望遠鏡・紙入・煙草入・茶碗・人形など。

16和歌幅

以上二件春文 一幅

⑪松平慶永（福井十六代藩主）

文政十一年（一八二八）九月二日、徳川宗家の親族田安斉匡の八男として生まれた。

天保九年（一八三八）十一歳の時、越前松平家の養子となり、福井十六代藩主に就任した。当時藩は財政難にあえいでおり、

慶永は若くして藩財政立直しに着手し、本多修理、中根雪江、鈴木主税、橋本左内等を登用し、熊本の横井小楠を招いて政治

的手腕を発揮した。さらに若い藩士に洋学教育をすすめ、時代の動きを感じとらせ、王政復古に際し、それらの人々は重大な

役割を果たした。

藩外では、日本が攘夷か開国かという重大問題に直面し、尊

皇敬幕で開国論を唱えた慶永は老朽化した幕政を雄藩連合で改

革、朝幕融和の立場をとり、同じ開国論者ではあったが、譜代

大名だけで幕権をさらに伸ばそうとする立場をとる井伊直弼と

対立、ことに將軍継嗣問題をめぐって激突し、安政五年（一八

五八）井伊直弼が大老となるや、慶永は隠居謹慎の身となった。

しかし井伊大老の死後、政事総裁職に任せられ、朝幕の間に

立って維新回天の大業に貢献した。島津久光、伊達宗城、山内

容堂と並び幕末の四賢公と称せられる。

明治二十三年（一八九〇）六十三歳で歿した。

17書 幅

18富士の画並びに讃

一幅

19手回手沢品類

二十数点

舶載科学器械類・文具類・携帯品類など。

以上三件春文

⑫松平茂昭(福井十七代藩主)

天保七年(一八三六)越後糸魚川藩主松平直春の子として生まれ、安政四年(一八五七)糸魚川藩一万石の藩主となる。はじめ直廉と名のり巽嶽と号した。

安政五年(一八五八)七月、井伊直弼との政事に敗れて隠居急度愼を命ぜられた松平慶永(春嶽)のあとをついで、福井十七代藩主となる。幕末、激動多難の中に、よく藩を治め、政局の中心にあった養父慶永をたすけた。しばしば国政に参加して建議し、長州征討にあたっては副将として出陣、また会津征討にも藩兵を指揮した。

維新後、進んで版籍奉還を行ない藩知事となり、侯爵を授けられ、明治二十三年(一八九〇)七月、五十五歳で歿した。

20 「伝是楼」の扁額

木版に茂昭自筆の「伝是楼」の三字を彫刻したもので、旧福井藩校明新館の蔵品である。

一面
本館蔵

⑬松平幸子

久我建通(公家)の女。明治元年(一八六八)福井十七代藩主松平茂昭の内室となり、明治十年(一八七七)若くして歿した。

21 「九十賀和歌」の折本

松平幸子が書写して松平慶永(春嶽)へ献呈したもの。

一点
春文

鯖江藩

⑭間部詮勝(鯖江七代藩主)

七代詮允の養子となり、八代藩主となる。奏者番加役、寺社

奉行、大坂城代、京都所司代等を歴任して、安政五年老中となり外国掛勝手掛に就任した。時にアメリカ合衆国は、日米通商条約を迫り、大老井伊直弼は勅許をまたず、条約に調印した。

詮勝は大老に代り、条約調印の事情を朝廷に説明するため、上洛し、その大任を果した。しかし、直弼と詮勝は安政の大獄により囚獄中の志士の処分——直弼は処分を厳にし、詮勝は人命をうばわぬことを主張——や、直弼が罷免した幕吏の待遇めぐり、意見が対立し、その役職を解かれ、文久二年(一八六二)領知五万石の内一万石を削られた。晩年は、書画にしたりし、明治十七年(一八八四)八十三歳で歿した。

22書幅

一幅
春文

⑮間部詮実(鯖江八代藩主)

鯖江八代藩主間部詮勝の子として鯖江に生まれる。文武両道に通じ、常に世情の頹廢を憂うる謹厳な人物であった。絶えず画帖を携行し、興味を引かれる景色・事物に出会うと、駕籠の中においても直ちに筆をとって写生し、筆勢も見事であったという。

23書幅

一幅
春文

勝山藩

⑯小笠原長守(勝山八代藩主)

勝山七代藩主小笠原長貴の子として生まれ、天保十一年(一八四〇)八代藩主となる。化堂と号し、書画を善くし、風雅を愛し詩作・俳句にたくみで、天下の文人と交遊した。生涯最も詩

作を愛し、自筆の詩稿が数百冊にのぼったと伝えられている。
明治二十四年（一八九一）七月歿した。

24書 幅

春 文 一幅

松岡藩

⑰松平昌勝（松岡初代藩主）

第四代福井藩主光通の庶兄で正保二年（一六四五）松岡（吉田郡松岡町）に五万石をもって分封され福井藩の支藩である松岡藩が誕生した。元禄六年（一六九三）に歿し、三男昌平が第二代松岡藩主となった。また、昌勝の嫡子綱昌は第六代福井藩主となり、五男吉邦は第八代福井藩主となっている。更に享保六年（一七二一）松岡二代藩主昌平は吉邦の命により福井九代藩主（昌平を改名して宗昌と名のる）に就任、これより松岡藩は福井藩に合併せられ、廃藩となった。

25茄子の画幅

一幅 寄託品

26松岡藩家中絵図

寶永六年（一七〇九）の図、嘉永六年（一八五三）山崎英

常写。

本館蔵

府中（武生）領主

⑱本多副元（府中本多家九代）

弘化二年（一八四五）松平頼功（石岡）の二男として生まれ、文久三年（一八六三）、府中（武生）領主本多家を相続、福井藩家老となった。

長州征討・会津征討等には、藩主名代として藩兵を指揮し、

明治十七年男爵を授けられた。

宮内省御用掛、南條・今立郡長、貴族院議員などを経て、明治四十三年（一九一〇）歿した。

27書 幅

春 文 一幅

〔武人〕

武術

⑲西尾仁左衛門

名は宗次。相模国（神奈川県）の武将で、遠州高天神（静岡）で武田氏と戦って功があり、文禄二年（一五九三）福井藩祖結城秀康に七白石で召抱えられる。大阪夏の陣に二代藩主忠直に従って出陣、敵の首十三をとり、更に敵將真田幸村を討取って武名をあげ、千八百石に増えられた。

寛永十二年（一六三五）歿。子孫は代々福井藩に仕え、寄合席三十九家の一つとして明治まで続いた。

28薙刀

一振

無銘。刃長二尺一寸五分。柄六尺九寸。

29采配

一点

柄朱漆銘「真田幸村血付采配」。

以上二点寄託品

この二点の武具には、右記添書が付属していて、西尾家に代々伝えられたものであるが、のち藩主松平家の所蔵に帰し今日に至っている。

添書「采配 薙刀。西尾久馬所持。祖先西尾仁左衛門尉宗次、大阪ノ役ニ茶白山陣ニ於テ、真田左衛門尉幸村ヲ討取、此両品ヲ分捕。」

⑳ 明石甚左衛門

兵法学者。名を慶弘といった。父は藤太夫貞弘といい、もと福井藩老酒井家の与力をつとめていたが、兵学に通じていたため藩士の列に加えられた。

その子甚左衛門慶弘も、兵法の研究に余念なく、享保五年（一七二〇）十七歳の時、父の跡を継ぎ、元文三年（一七三三）十代藩主宗矩の命で兵学書「兵法雄鑑五十二篇」の注解をして献上、藩の兵学師範として抜擢され、藩士を教育した。

武田流を基礎に諸流の長所をとり入れた一流をのみだし、門人は千人を越えたと伝えられている。

明和五年（一七六八）六十五歳で歿し、子孫相継いで藩の兵学師範をつとめた。

30 「兵法雄鑑」の巻軸、
一巻

明石甚左衛門慶弘が、元文六年（一七四一）二月、福井藩老酒井典膳に「兵法雄鑑」巻五十二の内から「城取極意九箇條」の秘事を相伝した免許状である。

31 奈良勝之助宛 兵法免許状
野村実氏藏
一通

檀紙折紙。明石甚左衛門豊弘が、弘化三年（一八四六）二月、福井藩士奈良勝之助に伝授した兵法免許状である。福井市春嶽公記念文庫に収められた明石家文書中の一点である。

春 文

（参考資料）

- ① 日置流弓術神道秘説の巻軸、寛文十年（一六七〇）。寒河久兵衛尉より荒井伴右衛門宛。
- ② 日置流弓術印可目録の巻軸。寛文十年。寒河久兵衛尉より荒井伴右衛門宛。
- ③ 日置流弓術系譜の巻軸。寛文五年（一六六五）。寒河久兵衛尉より荒井伴右衛門宛。

雨田光平氏贈

33 鷹狩図説の巻軸
一卷

福井藩校旧蔵品。

本館蔵

近代の軍人

㉑ 佐久間勉

明治十二年（一八七九）九月十三日、三方郡北前川村（旧八村、現三方町北前川）で佐久間可盛、まつ夫妻の二男に生まれた。佐久間家は数代前、近江国から若狭へ移り、前川神社の神官をしていた家柄であった。

明倫小学校、三鴻尋常高等小学校高等科、福井県尋常中學校小浜分校（県立小浜中學校）を経て、海軍々人を志望し、海軍兵学校を受験した。一度失敗したが、明治三十一年（一八九八）入学を果し、卒業後、海軍少尉候補生となつて、練習艦「比叡」に乗り組んだ。明治三十六年（一九〇三）海軍少尉に任官、日露戦争では「吾妻」に乗り組み、その後第十五水雷艇隊付となり「雲雀」に配属され、中尉に進級、分隊長心得となる。日露戦争以後は水雷術練習所学生第一潜水艇隊長、第一艦隊参謀、駆逐艦春風の艦長などを歴任、明治四十二年（一九〇九）わが国の潜水艦草創期に国産初の第六潜水艇々長に任命され、翌年四月演習中、瀬戸内新湊沖で沈没殉職。この時沈んだ艇内で沈着且つ勇氣を持って遺書を記した。このことは戦前の修身の教科書に「沈勇」として採用されており、また沈着勇氣ある態度は海外でも広く賞讃され、米国の著名な評論家H・W・ポールドウインもその著書で紹介している。

明治四十三年（一九一〇）四月十五日、三十二歳で歿した。

34 海軍大尉佐久間勉関係資料

実兄佐久間光盛宛自筆書簡。小浜中學校時代所用教科書（自筆写本）。遺言書（複製）。その他。

青池太右衛門氏贈

②加藤寛治

福井藩士加藤直方の子として明治三年（一八七〇）十月福井に生まれた。十三歳にして海軍兵学校予備生徒となり、明治二十四年（一八九一）海軍兵学校を首席の成績で卒業、累進して昭和二年（一九二七）四月海軍大将となる。

軍縮会議の随員、連合艦隊司令長官、軍令部長等の要職を歴任し、昭和十年（一九三五）六十六歳で現役を退いたが、同十四年（一九三九）二月、七十歳をもって歿した。

35海軍大将加藤寛治関係資料

一括

海軍大将正装一式。常用双眼鏡。海軍少尉候補生時代「航海日誌」。その他。

寄託品

②岡田啓介

慶応四年（一八六八）福井の新屋敷（現・日の出三丁目）で、父喜藤太、母波留の長男に生まれた。県立福井中学校卒業後、駿河台の共立学校、本郷の陸軍有斐学校、海軍兵学校、海軍大学校に学び、分隊長、海軍水雷術練習所教官、海軍々令部第三局長、千歳副長、八重山副長、春日、鹿島艦長等を歴任し、大正十三年（一九二四）には連合艦隊司令長官等を勤め活躍した。

昭和二年（一九二七）田中内閣成立するや、海軍大臣に任せられ、その重責を果し、浜口内閣では、軍事参議官、議定官に補せられ、海軍々縮問題でも登用された。若槻、犬養内閣の後、齊藤内閣になるや、再び海軍大臣に任せられ、満州事変、上海事変、五・一五事件と内外の騒然とした時だけに部内の自粛自戒につとめた。昭和八年（一九三三）大臣を辞したが、翌九年大命降下して岡田内閣を組閣することとなった。岡田内閣は同十一年三月まで続いたが、この間帝人事件と三上忠造起訴問題、桐生で起った白簿の誤導事件等々の重大問題を善処した。しか

し同十一年二月二十六日、「二・二六事件」が勃発し、奇蹟的に助かった。その直後、総辞職し、自宅に引籠って謹慎していたが、やがて重臣に加わり、大東亜戦争に突入するや、終戦の促進につとめた。

昭和二十七年（一九五二）十月十七日、八十五歳で歿した。

36海軍大将岡田啓介関係資料

一括

五絶色紙。宮中杖。海軍士官用短剣。硯箱。筆等遺愛品。その他。

岡田貞寛氏贈

②蒲穂

明治十二年（一八七九）一月、今立町庄境の蒲五八郎の四男として生れ、その後、長兄八郎の養子となり、蒲家第二十五代当主となる。

陸軍士官学校に入り、明治三十四年（一九〇一）騎兵少尉に任官、累進して昭和六年（一九三一）中将に親補され、同十一年八年予備役に編入された。その間、皇族附武官、騎兵第五聯隊長、騎兵第三旅団長、参謀本部附、陸軍運輸部長、第十六師団長等を歴任した。又国際連盟日本代表として渡欧活躍しフランス語に通じた有能な軍人であった。

昭和十二年（一九三七）大日本傷痍軍人副会長、同二十七年改組再建され会長に就任、大東亜戦争後の傷痍軍人救済事業に挺身した。また二十八年から三十四年の間、東京における「景岳会」の会長をつとめた。

昭和三十五年（一九六〇）八十二歳で歿した。

37陸軍中将蒲穂関係資料

一括

書幅。戦傷奉公杖、傷痍軍人手帳。軍人傷痍記章。その他。寄託品

②5 長谷川清

明治十六年（一八八三）五月七日足羽郡社村（現福井市久喜津町）に生まれた。同三十七年（一九〇四）少尉に任官と同時に、軍艦三笠に乗組んで日本海海戦に参加した。有名な東郷司令長官を中心とした三笠艦橋図の画中の人物の一人である。

累進して昭和十四年海軍大将に任ぜられたが、その間海軍次官、第三艦隊司令長官、支那方面艦隊司令長官、横須賀鎮守府司令長官等の要職を歴任した上、昭和十五年（一九四〇）から十九年（一九四四）の間、台湾総督に任ぜられ、台湾の統治に尽した。

なお支那事変時、支那方面艦隊司令長官としての重責を果たした功により、生存者として功一級金鷄勲章を授けられたことは特筆すべきである。

福井の生んだ三海軍大将（加藤寛治、岡田啓介、長谷川清）の一人である。

昭和四十五年（一九七〇）八十八歳で歿した。

38 海軍大将長谷川清関係資料

一括
書幅。各種辞令類。功一級金鷄勲章並びに勲記。皇后陛下下賜の御手編襟巻。その他。

長谷川肇氏贈

②6 平馬康雄

故陸軍曹長。大正十三年（一九二四）一月六日、福井市渚町の農家の長男として生まれた。

初め農林学校に進んだが、少年飛行学校を内緒で受験し合格した。昭和十四年（一九三九）、憧れの「東京陸軍航空学校」へ入学。

大東亜戦争に突入するや、第一線戦闘員として、勇戦敢闘した。昭和二十年（一九四五）アメリカの爆撃機が日本本土に侵入して、盛んに東京を爆撃するようになり、平馬曹長は、首都

防衛の戦闘機隊の一員として、アメリカの大型爆撃機「B-29」と空中戦を展開し、その功績を挙げたが、同年四月七日、埼玉県越ヶ谷上空での空中戦で機もろとも越ヶ谷の田の中に自爆。時に年令二十一歳であった。

昭和四十七年「少年飛行兵第九期会」生存者一同が主体となり、埼玉県、越ヶ谷市等の援助を受け、遺骨、遺品、機体等がすべて発掘された。

39 陸軍曹長平馬康雄関係資料

一括
埼玉県越ヶ谷市大吉より発掘の「五式戦闘機」残骸。平馬曹長遺品類。

平馬徹男氏贈

〔政治家〕

②7 明石縫殿

明石家は、もと二十石取りの福井藩下級武士であったが、勘之丞正府のとき七代藩主吉品に、その俊才を見いだされ、次々と累進して正徳二年（一七一二）遂に家老の列に加えられ、明石縫殿と称した。

以後、子孫相継いで福井藩々老格の高知席十七家の一つにつらなり、縫殿・将監などと称して藩政に参与した。

嘉永五年（一八五二）十月付の十六代藩主慶永時代の給帳には「高知席 一高千石 明石将監」とある。

40 明石家文書

一括
福井歴代藩主より明石縫殿宛朱印状類。明石家歴代拝領宛行状。明石縫殿様御知行之内岩倉村高付家数人馬御改帳。その他。

春 文

⑳ 稲葉采女

稲葉家は、美濃国（岐阜県）厚見郡稲葉より起つた名族で、一族は白杵・淀・館山などの城主となり老中もつとめた譜代の大名である。

福井藩に仕えた稲葉家は、三代藩主忠昌が寛永元年（一六二四）越後（新潟県）高田の城主から福井に移封された時、出雲守正房が糸魚川から随従して三千石を与えられたのにはじまる。その子妥女正信は家老に任ぜられ四千三百五十石を領し、のち代々妥女を称し家老をつとめ、藩政の中心となった。貞享三年（一六八六）藩領が半減するや、稲葉家の知行も二千百七十五石となり維新にいたつた。

41 稲葉家文書

一括

稲葉家旧蔵の文書類であるが、私的な往復書簡等が多く公式文書は少ない。代々藩政の枢機に参与した家柄であるだけに、藩政史研究上の重要書類が少なくない。

春 文

㉑ 鈴木主税

名は重栄、通称主税、純淵、鑿城などと号した。文化十一年（一八一四）福井藩士海福正敬の子として生まれ、同藩鈴木長恒（定座番外、四百五十石）の養子となる。幼少より学問を好み、その英才振りは、早くより藩内の評判となった。

天保十三年（一八四二）十六代藩主慶永（春嶽）の時、寺社奉行となり、のち町奉行に任じて善政をしいた。この間、城下木田の町民が、その仁政を深く感謝し、生前より世直神社を創建して神と仰いだことは有名である。この神祠は、今も旧一里塚のあたり、福井市みのり二丁目に現存し、崇敬をあつめてい

る。
弘化二年（一八四五）以降、側向頭取、側締役などに任じて年少の藩主慶永を補佐し、嘉永六年（一八五三）黒船の来航を

知るや、奮然として、江戸に赴き、藩政の機密に参与し、国事に奔走することとなった。諸藩有意の士と広く交わり、意見を交換して、自藩の進路を誤らせず、学事、財政、兵備等すぐれた建策をして藩政の一新をはかった。俊秀橋本左内を見いだし慶永に推挙したのも主税であった。

安政三年（一八五六）江戸常磐橋藩邸内で、左内に見とられつつ、四十三歳で歿した。生前、水戸の藤田東湖は「今や真に豪傑と称すべき者、天下に鈴木主税・西郷吉之助（隆盛）あるのみ」と評し、肥後藩家老長岡監物は「學術正大にして徳義智識備はるは重栄に如くはなし、余最も重栄に服す」と評している。

42 書翰

一卷

平本某宛。九月二十一日付ほか二通。

桑山岩雄氏贈

㉒ 中根雪江

文化四年（一八〇七）七月三日、福井藩士中根衆譜の長男に生まれ、少年時代は栄太郎・壮年時代には靱負または師資と称し、晩年には雪江と号した。青年時代は儒者高野真齋に師事。二十四歳には第十四代藩主齋承に仕え、二十六歳の時、江戸の藩邸勤務となり、平田篤胤の門人となる。

弘化年間（一八四四～四七）松平慶永（春嶽）に抜擢されて藩政改革に参画。また嘉永六年（一八五三）ペリー来航を契機に幕末の政局にも活躍し、一橋慶喜擁立や公武合体運動を画策推進した。明治新政府では参与となって活躍、幕末政治活動を筆録したものに「昨夢記事」「再夢記事」「丁卯日記」「戊辰日記」などがあり、いずれも維新政治史の貴重な史料となっている。

明治十年（一八七七）十月三日、七十一歳で歿した。

43書 幅

寄託品

一幅

44短刀

一振

幕臣大久保一翁が、中根雪江に贈ったもの。銘(表) 宗有作 元治元年冬至。(裏) おもひよこ志まなし。刀身表裏に搦と錠の彫物あり。

拵。鞘「カリン魚盡し。磁石入。」

柄「金鯨。柄頭 蜻蛉。」小柄「紫檀。銘法橋雪齋。」

春 文

45印籠

一点

牧童蒔絵。銘梶川作。慶応四年(一八六八)五月、中根雪

46矢立

一点

江が「徴士参与職」を免ぜられた時、明治天皇より拝領。

島雪齋作。紫檀製。中根雪江手沢。

47油彩肖像画

一額

亀井竹二良筆。明治十年(一八七七)十一月、雪江歿後ま

もなく描かれたもの。

以上三点寄託品

③1橋本左内

天保五年(一八三四)福井藩医の家に生まれ、十六歳で大阪緒方洪庵の適塾に入門、二十一歳の時、江戸に遊学、坪井信良杉田成卿の教えを受け、早くより英才の聞えが高かった。

藩主松平慶永(春嶽)に、その秀才と識見を認められ、安政二年(一八五五)二十二歳で医員を免ぜられ、藩政に参与し、藩内の教育に努力した。

將軍継嗣問題が起るや慶永のもと一橋慶喜を擁立すべく、京都、江戸に活躍、大いにその抱負を行なわんとしたが、安政五年(一八五八)「安政の大獄」に捕えられ、翌六年十月十六歳で斬に処せられた。

48書 幅

49自筆覚書類

一点

①丙辰戌月日録。安政三年二月から五月に至る自筆日記。

②景岳先生手帳。横綴の覚書帳。薬品処方箋・西洋兵制など書留められた内容は広範囲にわたっている。

③読書筆記。和漢籍の読後感を書留めたもの。

④吟稿。安政五年(一八五八)十月以降、幽囚の身となって以後の吟詠を月日の順に記録したもの。

⑤景岳割記甲集 子集日涉。「論文」「雑説」など自己の論説や、諸書の拔萃。

以上二件春文

③2松田和孝

名は和孝、東吉郎と称し、蓼水と号した。福井藩士(江戸定詰。百石)松田理兵衛の子として生まれ、小野軍九郎・芳野金陵に入門、学問を修め、若くして藩校の助教に任ぜられた。橋本左内・桜任蔵・久坂玄瑞等と親しく交わり、互いに啓発しあつた。

読書の間に、少しでも政治の補いとなるもの、主君の修養の助けとなるような箇所を見いだすや、直に書写して藩主慶永(春嶽)に上呈し、慶永もこころよく、これを受け自戒としたと伝えられている。

安政五年(一八五八)、井伊直弼が大老に就任し、開国・將軍継嗣問題等で意見が対立した慶永を隠居急度慎の処分にするや、和孝は主君の罪を晴らさんとして井伊邸に直訴せんとするなど、身命を賭して八方手をつくしたが成功せず、遂に安政六年(一八五九)六月、自決して志を明かにした。行年二十三歳であつた。

50蓼水存稿

一冊

蓼水は、松田和孝の号。明治二十七年(一八九四)九月、和

孝の甥白井光太郎が伯父和孝の遺稿類を編修出版したものを。
松平永芳氏贈

③③ 村田氏寿

氏寿は文政四年（一八二一）福井藩士村田氏英の長男として福井城下に生まれた。幼名を己三郎という。安政三年（一八五六）橋本左内と共に藩校明道館に出仕し、のち幹事となる。翌四年藩主松平慶永（春嶽）の命により横井小楠招へいの下交渉のため熊本へ赴く。元治元年（一八六四）七月、蛤御門の変が起った時、氏寿は藩兵を率いて堺町御門を警備したが、長州軍の砲弾によって重傷を負った。更に慶応四年（一八六八）六月、会津征伐に際しては藩兵を率いて越後に出陣し、若松城落城後は、同地方の民政安定に努力し、以後藩の参政職、版籍奉還後は藩知事松平茂昭を補佐し、福井藩権大参事心得・福井藩大参事となり、廃藩置縣断行後、福井県参事、更に岐阜県権令に栄転、明治十年（一八七七）退官。同三十二年（一八九九）五月、七十九歳で歿した。

51書 幅

52村田氏寿所用「袴」

53徳富蘇峰筆「関西巡回記」題字の幅

村田氏寿の遺稿「関西巡回記」を昭和十五年氏寿の曾孫英彦氏が出版するに際し、徳富蘇峰に依頼、題字として用いられたもの。

54弾丸

禁門の変（いわゆる蛤御門の変）の際、越前兵は京都御所堺町御門を警備していたが、これを指揮していた村田氏寿が負傷、体内から摘出したものである。

55村田氏寿編纂資料稿本類

統再夢紀事稿本。その他。

以上四点寄託品

一括

③④ 酒井十之丞

代々福井藩の家臣で禄八百石の酒井家に生まれる。通称彦六、後十之丞と云い号を帰耕と称す。幕末春嶽公を輔けて国事に奔走し、王政復古に際し中根雪江、毛受洪と共に参与職に任ぜられたが、明治二十八年病歿した。

同三十六年十一月十三日特旨を以って従四位を追贈された。

56日記

①「中仙道御道中日記」文久二年（一八六二）五月、藩主の帰国に供奉した際の日記。

②「心志録日記」七月中（文久二年か）の日記。

③無表題。慶応二年（一八六六）五・六月の日記。

春 文

③⑤ 浅井八百里

福井藩士。名は政昭、通称八百里。柏庭、秋水軒などと号した。文化十年（一八一三）福井に生まれる。

幼少より学問を好み、天保元年（一八三〇）十七歳の時、学業優秀なりとして、藩主の賞与を受けた。

天保九年（一八三八）、松平慶永（春嶽）が十一歳で藩主となるや、縁戚にあたる中根雪江とともに、学問の上から、国家につくす明君に育てあげんと言いかわし、主君の教育と補佐に全身全霊を打ちこんだ。

慶永は晩年、その著「真雪草子」の中で、自分の人生に最も幸福であったのは、家臣に浅井八百里がいたことであると述べて、その恩恵に感謝している。

清廉潔白な人柄で、藩士達は君子なりと賞揚したが、嘉永二年（一八四九）わずか三十七歳で歿した。

著書に福井藩史がまとめられていないのを嘆いて編纂した「執筆全鑑」などがある。

57 書翰

一通

弘化二年（一八四五）六月五日付。鈴木主税宛。浅井八百里が幼君松平慶永（春嶽）の日常の言動について、心づいた点を報じたもので、心血を注いで主君を補導した八百里の精神をよく示す史料である。

58 関係書籍類

一括

「経訓論説」。天保十四・五年（一八四三・四）十六・七歳の頃の松平慶永（春嶽）の論説集。文中随所に浅井八百里の朱筆添削及び読後評が付されている。その他。

以上二件春文

③6 長谷部甚平

福井藩士。名は恕連、通称甚平。南村、菊陰と号す。文政元年（一八一八）福井に生まれる。

長谷部家は、福井藩創建当初よりの重臣で、初代茂連は藩祖秀康に仕えて四千石を領した。恕連も目付役、勝手奉行、寺社町奉行、郡奉行、製造奉行等の要職を歴任し、その間、財政難悩む福井藩の経済回復に大きな功績を収めた。

横井小楠と深く交り、その影響下に尊皇開国を主張して藩論を統一した。

明治元年（一八六八）、美濃国（岐阜県）笠松県知事に任せられ、同四年廃藩置県とともに岐阜県令となり、同六年（一八七三）十一月、五十七歳で歿するまで在職した。

県令在職中、勇断をもって水利土木の工を起し、事務を改良して簡潔にし、常に「人民の便を保たんと欲せば、官吏自ら代りて其勞を受くるにあり」と部下に訓示して、県民の非常な支持を得たという。

59 書翰

一通

橋本左内宛。安政五年（一八五八）七月十八日付。橋本左内関連書翰巻軸八巻の内に収められている。

春文

③7 由利公正

文政十二年（一八二九）十一月十一日、福井毛矢町で、福井藩士三岡次郎大夫義和、幾久夫妻の子として生まれた。幼名義由、通称を石五郎といった。嘉永四年（一八五一）二十三歳の時、熊本から福井へ来た横井小楠の講義を聞き感激し、その教えを受けた。橋本左内とも親交があり、福井藩政の改革に努力した。

文久二年（一八六二）郡奉行に抜擢され、名を八郎と改めた。翌年横井小楠が解任された際、三岡八郎も幽閉塾居を命ぜられた。その間慶応三年（一八六七）には坂本龍馬が来福し、三岡八郎と会見している。同十二月坂本龍馬の生前の進言により、新政府の参与に登用され、御用金穀取扱方となり、金札の発行など一年余にわたって新政府の財政の危機を救い、翌年三月、五箇条御誓文の起草にあたった。間もなく明治と改元、名を公正と改めた。しかし金札の価値下落で流通の困難が起り、明治二年（一八六九）会計御用掛を辞任し福井へ戻り藩政に参画、明治三年、姓を由利と改めた。

明治四年東京府知事に任命され、翌年岩倉具視に随行し渡欧。外遊中明治五年十二月、府知事免官、明治八年（一八七五）元老院議員、明治二十三年（一八九〇）貴族院議員などを歴任し、明治四十二年（一九〇九）四月二十八日、八十一歳で歿した。

60 五ヶ條御誓文の書幅

一幅

寄託品

61 太政官札

二点

金拾両、金壹分。

③8 近藤了介

近藤了介は、はじめ福井藩徒組五人扶持の最下級武士であつた。

安政五年(一八五八)正月、激烈化した將軍繼嗣問題をめぐる政争に勝利をおさめるべく、藩主慶永(春嶽)より、入京して公郷を説得すべき命を受けた橋本左内は、入京後、自分の配下にあつて活動する下役に不足し、在藩の村田氏寿にしかるべき人材を派遣するよう依頼した。

この時、氏寿の目にとまり一躍拔擢されたのが、三十五歳の近藤了介である。

了介は二月下旬京都に到着し、徒目付として京都の「時情探索調べ方」を命ぜられ、左内の手足となつて縦横の活躍をしたが、安政の大獄で左内が倒れた後は、青山貞の下役として諸方の情報を収集するなど主に「探索調べ方」として手腕を振るつた。

明治改元後は、福井にとどまつて足羽県大属などの公職を歴任、村田氏寿からの再三にわたる上京(東京)の勧告を断わつて、晩年は農耕に従事し、明治三十一年(一八九八)七十五歳で歿した。

63和歌幅

一 幅
寄託品

③9 青山 貞

福井藩士。名は小三郎、のち貞と改めた。文政九年(一八二六)福井に生まれ、幼少より学問、武術を好み、二十六歳の時藩主より槍術(やり)の格別上達を賞せられ、またこの頃より

私塾をひらいて漢学を教授した。

万延二年(一八六一)二月、藩命により樺太及び蝦夷地(北海道)を探查し、七月帰福して地理、産業など調査結果を報告した。

同じ年九月、横井小楠の帰国に際して、修業かたがた同道すべしとの命を受け、小楠に随従して九州を巡遊、大いに識見を広め、以後藩命により江戸・京都・大阪など、維新の激動の渦中に身を投じ、情報を集め天下の動静を察知して報告したが、その間、幾度か持前の豪放さで危地を切抜けている。

明治改元後は、群馬県令、奈良県権令、元老院議員、秋田県知事などを歴任、男爵を授けられ貴族院議員をつとめた。
明治三十一年(一八九八)歿した。

64書 翰

鈴木準道宛七月二十日付。

一通
鈴木秀枝氏贈

✓ ④0 梅田雲浜

幕末の志士・失子学派の儒者・若狭小浜藩士。文化十二年(一八一五)に生まれた。通称源次郎・号雲浜・湖南・東瑯と称す。嘉永五年(一八五二)国事建言のことで幕府の忌憚にふれて追放、浪人となる。

尊王攘夷論を唱え大義名分を鼓吹、在京志士を指導、將軍繼嗣問題では、慶喜の擁立に尽力。青連院宮尊融親王の知遇を受け、幕府改造の意見書を出し「戊午の密勅」降下の因をなした。安政の大獄に際し、第一に捕えられ、安政六年(一八五九)病にかかり獄死した。

65書 幅

一通
谷口さを氏贈

④1 鈴木準道

福井藩士。天保十二年（一八四一）福井城下に生まれた。明治元年（一八六八）四月、郡奉行となり、その後民政局大属、福井藩大属、福井県権典事、岐阜県聴訟課長、大垣裁判所支庁長等を歴任し判事補に進み、明治九年十二月退官した。のち松平家家扶を勤めたが、同十二年五月二十七日初代福井市長に就任、在職五年八ヶ月、二十八年一月二十七日職を辞し再び松平家家扶となり大正十年三月十三日歿した。

66 市務日記

明治二十二年より同二十七年（一八八九―一八九四）に至る、初代福井市長在任中の日記。

鈴木秀枝氏贈

④2 山本条太郎

慶応三年（一八六七）十月十一日、福井市松ヶ枝下町に生まれた。明治六年（一八七三）一家をあげて上京。明治十五年（一八八二）二月、三井物産横浜支店に入社。以来実業畑を歴任。明治四十二年（一九〇九）同物産の常務取締役となった。大正三年（一九一四）三井物産を辞任して、日本火薬製造（株）を創立。引続き多くの事業会社を創設し、大正九年（一九二〇）衆議院議員に当選。政界に乗り出し、昭和二年（一九二七）七月から同四年七月迄二ヶ年南滿州鉄道の総裁をつとめた。衆議院当選四回の後、昭和十年（一九三五）貴族院議員に選任されたが、翌十一年三月二十五日、七十歳にして歿した。

67 山本条太郎関係資料

御前講演原稿。シルクハット。常用事務机。書翰額。その他

寄託品

④3 杉田定一

嘉永四年（一八五一）六月二日、坂井郡、波寄村の豪農杉田家に仙十郎の子として生まれた。幼名鶴吉郎といったが、南越第一の勤皇僧傑滝谷寺の道雅和尚に定一の名鶴山の号を与えられた。

学問を道雅、吉田東篁等に学び、後大阪、東京に出て修学したが、感ずる所あつて専ら政治学を研究した。明治初期自由民権論を唱導し、二十五歳の折下獄したのを皮切りに、波乱に富んだ政治活動に挺身し、明治三十九年（一九〇六）衆議院議長をつとめ、ついで貴族院議員となった。大正に入り元老政治が政党政治の発達を阻害しているのをいかり、尾崎行雄と共に桂内閣を倒したのを始めとして憲政擁護運動を展開し、政党政治の正しく発展することに努力を払い策略、弁舌なき誠実な政治家であった。

昭和四年（一九二九）三月二十三日、七十九歳で歿した。

68 書幅

寄託品

69 文官大礼服

若林久雄氏贈

〔神職〕

④4 足羽敬明

敬明は寛文十二年（一六七二）福井に生れた。足羽神社神職である。学識深く足羽社記、越前国式内地名考以下著書も多い。平素は節儉をとおとび、余財があれば図書を購入した。内蔵権頭となり従四位上に叙せられる。宝暦九年（一七五二）二月十日八十八歳で歿し、華藏寺に葬られた。

70 足羽社略縁起

享保二年（一七一七）八月序。足羽敬明撰並びに筆。

本館蔵

春 文

〔僧侶〕

④5 平乗寺巧存

享保五年（一七二〇）今立郡小坂村真宗本願寺派明正寺に生まれ、十八歳の時近江正崇寺の法霖に入門して佛学を修めた。のち、足羽郡太田村（福井市太田。文殊山下）の平乗寺の養子となり、その住職となった。

学徳兼備の名僧で、他宗を含め多くの僧俗が教えを乞い、五十歳の時本願寺派の教学をつかさどる者として最高の地位である「能化大講主」に任ぜられた。

宝暦十二年（一七六二）、越前国内に「無婦命安心」という邪義がはびこり、次第にその勢が強くなった時、憤然としてその排除に立ちあがり、福井別院で数十日にわたり首唱者と論争遂に回心状を提出させたことは有名である。

寛政八年（一七九六）、七十七歳で入寂した。

72 書 幅

春 文 一幅

④6 憶念寺良雄

南條郡金粕村、真宗大谷派憶念寺の住職。徳母、金洲と号した。

京都に出て真宗のほか、諸宗の教学を学び、文化十年（一八一三）帰国、これより先、火災のため荒廃していた憶念寺を復興した。

この間、金粕村を所領としていた美濃（岐阜県）郡上藩主青山氏の帰依を受け、その援助を得た。学徳を慕って諸国の僧が教えを乞い、擬講に任ぜられたが、

天保十年（一八三九）六十二歳で入寂した。

73 書 幅

春 文 一幅

④7 浄勝寺丹山

丹生郡生村真宗大谷派浄勝寺の住職。若くして一切経（大藏経ともいい、一万一千九百七十卷からなる。あらゆる經典を集大成したもの。）の校定（書物の字句などを比較して正しく定めること。）を決意し、京都建仁寺に所蔵の大藏経を用いて研究に没頭すること、文政九年（一八二六）より十一年間に及んだ。その間、文雅の心が深く、頼山陽をはじめ当代一流の文人と親しく交わった。

弘化四年（一八四七）、七十三歳で入寂した。

74 書 幅

宮下己代治氏蔵 一幅

④8 滝谷寺道雅

名は憲意。笑溪、支頤子などと号した。文化九年（一八一二）京都六角通、池田家に生まれた。

はじめ江戸浅草の大護院に入って佛学をおさめ、神道・儒学にも精通し安政三年（一八五六）三国の真言宗瀧谷寺住職となった。

梅田雲浜、頼三樹三郎、梁川星巖等と交遊し、尊王攘夷を唱え、諸国の志士が来遊して時局を語りあった。月照・月性と並んで幕末の勤王僧三傑と称されている。

慶応元年（一八六五）、王政復古をまたず五十四歳で世を去った。

75 遺墨折本

春文 一帖

④9 鴻雪爪

文化十一年(一八一四)備後国(広島県)因島に生まれ、六歳の時石見国(島根県)津和野の大定院(曹洞宗)に入り、当時禅僧として名高かった無底和尚の弟子となって出家した。弘化三年(一八四六)三十三歳の時、大垣藩戸田家の菩提寺であった全昌寺の住職となり、藩老小原鉄心と親交を深めたが、安政五年(一八五四)二月、松平慶永(春嶽)の召しに応じて、福井の孝願寺の住職となった。

孝願寺には、松平慶永をはじめ、中根雪江・長谷部甚平・堤正誼・由利公正など主だった福井藩士が来訪し国事を論じ教をこうた。雪爪の懐古談に、横井小楠に協力して藩士の薫陶に努力したことが記されていて、この時期の活躍ぶりが知られる。慶応三年(一八六七)彦根清涼寺の住職となって移住し、維新後は松平慶永の推挙で新政府のかかえた宗教問題の解決をはかるため召出され、還俗して大教院々長などに任じて国政に参与した。

明治三十七年(一九〇四)九十一歳で歿した。

76 書 幅

寄託品 一幅

⑤0 青陰雪鴻

天保三年(一八三二)武生に生まれた。鴻雪爪の後を継いで孝願寺住持となった。雪爪門下の逸材で、雪爪の山高水長図記に「余に従って薪水の労を取る者、幾百千なるを知らず、而して道心最も堅き者、雪鴻に若くはなし。」と記してある。明治十六年曹洞宗第一回の公選で永平寺貫主となったが、同十八年八

月五十四歳で歿した。

77 書 幅

春文 一幅

⑤1 南条文雄

嘉永二年(一八四九)岐阜県大垣市の大谷派住職の子に生れ、明治四年(一八七一)二十三歳のとき南条郡南条町金粕の憶念寺の養子となった。明治九年(一八七六)二十八歳の時、梵語学研究のためイギリスへ留学、その間六年、オックスフォード大学で世界的仏教学者マックスミュラーに師事し、明治十六年(一八八三)にオックスフォード大学から「大明三藏聖教目錄」を英文で刊行、南条文雄の名を世界的に広めた。また同年マックスミュラーと共著で「梵文無量経阿弥陀経」を出版し、世界の仏教研究者から古典的名著とされている。翌十七年三十六歳でマスター・オブ・アーツの学位称号をオックスフォード大学から与えられた。帰国後、四十歳で文学博士、五十八歳で帝国学士院会員となり、大正三年(一九一四)から十一年(一九二二)まで真宗大谷大学長を勤め、学僧の指導と全国の教化に尽力した。昭和二年(一九二七)七十九歳で歿した。

78 書 幅

宮下己代治氏贈 一幅

⑤2 望月信亨

明治、大正の佛教学者。浄土宗僧侶。明治二年(一八六九)武生市に生まれる。初名を松原勝次郎、明治二十六年神戸市藤之寺の養子となり同二十八年東京浄土宗本校卒業。明治四十四年浄土宗執綱、大正三年宗教大学々長、同十三年文学博士、昭和五年には、大正大学々長となった。明治三十九年に「仏教大

辞典」編集に着手、昭和十一年にいたり完成した。
昭和二十三年（一九四八）八十歳で歿した。

79 六字名号の書幅

望月信成氏贈

一幅

80 望月信亨編「仏教大辞典」

望月信成氏贈

十冊

本辞典は、望月博士が明治三十九年（一九〇六）から、昭和十一年まで、実に三十年もの歳月を費すと共に、博士の熱誠と学識とを信頼した学界、宗教界の幾多の知友と門下との総力を結集して、全七冊、六千頁に及ぶ大出版を成就したものである。

仏教に志す者は勿論、広く東洋を研究し、理解せんとする者にとつては、極めて必須の大辞典であり、今なお、その辛苦と学殖の結晶としての「望月仏教大辞典」は、その学の最高權威を保っている。

尚、昭和二十九年から三十三年にわたって世界聖典刊行協会において増訂版全八巻として整備し、さらに「補遺」二巻を加えて全十巻となっている。

本館蔵

〔医学者〕

⑤③ 三崎玉雲家

三崎家は、朝倉高景（第二代三宅黒丸城主）の四男、三段崎彈正忠弼景を家祖とする武門の家柄であったが、その医家としての歴史は六代安指が、谷野一栢の養子として医術を継いだのにはじまる。

谷野一栢は、もと奈良の僧侶であったが、入明して医学をおさめ、天文元年（一五三二）朝倉孝景に招かれて、その侍医となり、のち三段崎安指に医薬の法を伝えたものである。

安指以後、姓を三崎と改め、代々医術を相伝して玉雲軒と号し、藩医として松平家に仕え維新にいたった。三崎家の医家と

しての伝統は今日まで継承され、当代の玉雲氏まで十六代を数える。

81 松平慶永（春嶽）室勇姫より拝領の和服。

一着

赤綸子地牡丹・菊・藤花車文繡振袖・着丈一七一。桁五九。袖丈九八。

三崎玉雲氏贈

⑤④ 関 明霞

福井橋宗賢家に生まれ、山本家の養子となり、山本氏の本姓「関戸」をもじつて関氏を称した。

名は攀龍・字は子雲、通称を龍輔といい、明霞のほかに臥龍・棲霞なども号した。

家は代々眼科医として福井藩に仕え、明霞もその業にくわしかったが、享和年中（一八〇一）頃職を退き京都に出て、姓を京極と改めた。

文政二年（一八一九）九月、備中（岡山県）笠間において客死した。福井市加茂河原町丹巖洞には、退筆塚がある。

82 書幅

春文 一幅

⑤⑤ 半井南陽

福井藩医。文化九年（一八一二）に生まれ、名は保、字は伯和、通称元沖または仲庵といい、南陽また晚香と号した。

初め京都の某侍医の門に入ったが、のち大阪に移つて中川脩亭について医学を学んだ。

四十一歳の時、はじめて和蘭文典を読み、扶氏経験遺訓に従い、オランダ流の医術を施した。一般にまだ蘭方が普及していない中で、その拡張につとめ、福井藩における蘭方の興隆は、

一に仲庵の力によるところが多い。
明治四年（一八七二）十二月二十八日、大阪に病氣治療の旅
中、六十歳で歿した。

83 油彩肖像画並びに松平慶永（春嶽）筆蹟。 二額
作者 福井医学学校 画家 山田シゲアキ。明治七年十二月
製作。

讚文

「邦医昔歳情」蘭学「顧汝先鞭独出」群今日隆興非「偶爾」

長留「小照」表「遺勳」

題 半井南陽肖像

春嶽「永」

寄託品

84 遺 墨

鈴木秀枝氏贈 一点

⑤⑥ 笠原白翁

文化六年（一八〇九）五月足羽郡東郷村深見（現 福井市深見）に生まれた。号を白翁という。江戸で磯野公道について古医学を修め帰国して福井で開業したが、たまたま加賀の山中で大武了玄に蘭医学を問うて初めて西洋医学を志し京都の日野鼎哉の門に入った、時に三十二歳。かくして白翁は西洋医学を越前に弘め種痘法の奨励方を松平春嶽に建言し、嘉永二年（一八四九）十二月、自宅隣に浜町仮除痘館を開設、町民に種痘を実施した。

生涯医学発展に尽力し明治十三年（一八八〇）八月七十二歳で歿した。

85 笠原白翁所用「種痘器具」
種痘用メス 三点。牛痘入ガラス板 三枚 六点

86 笠原白翁所用「写真機」
外装木製堆朱 三二×二〇×高二四（糶） 一台

87 笠原文書 一括
京阪地方種痘伝播書類附東都伝達記録。戦競録 第五
巻（内題）。病院班次。海防私策 上・中。除痘館班次。
牛痘問答（自筆稿本並びに刊本）。牛痘鑑法。その他
以上、笠原健一氏贈

⑤⑦ 橋本綱常

福井藩医橋本長綱の四男として、弘化二年（一八四五）福井に生まれる。橋本左内の末弟である。

安政二年（一八五五）兄左内が家業を免せられ御書院番組に列せられたので、十一歳で家業を継いだ。文久二年（一八六二）

長崎に行き、オランダ人シントレルについて蘭学を修め、ついで江戸の松本塾に入って修業し、翌年帰郷して町民の治療に従事した。

元治元年（一八六〇）長州征討に従軍、慶応元年（一八六五）再び長崎に赴むき、ポードインに師事、翌年帰国して福井済世館の改良に参与し、奥外科医兼医学教授方を仰付けられた。

明治五年（一八七二）から十年まで、ベルリン医科大学、ウルツブルグ大学、ウィーン大学等に留学し、帰国後、文部省御用掛兼勤東京大学医学部教授に任命され、外科学を講義した。

のち、東京陸軍病院長、軍医総監、貴族院議員、宮中顧問官、日赤病院長等を歴任、子爵を授けられた。

若越医学会の初代会頭として、本県医学会につくすところも多かったが、明治四十二年（一九〇九）六十五歳で歿した。

88 風月三昆面銀瓶並びに橋本綱常筆添状 二点
下地・藤本長養齋。画工・滝和亭。彫工・香川勝広。高さ
一二・五

巻物一縦一九、横一五〇
明治三十三年橋本綱常が橋本左内墓所修築に尽力した郷土史家、福田源三郎に贈った品。添状に「皇太子殿下御下賜品

添状」の題がある。

福田堅三氏贈

58 岩佐 純

天保七年（一八三六）岩佐玄珪の子として福井で生れる。

福井藩の医学所済世館で医学を学ぶ。藩主松平慶永（春嶽）の侍医坪井信良についてはじめて西洋医学を学び、安政三年（一八五八）江戸の坪井芳州塾に入門して蘭学を修め、のちさらに下総（千葉県）佐倉の佐藤舜海に師事し、春嶽の侍医となり、また洋学所の教授をかねた。ついでまた藩命により長崎におもむき蘭医ボンペ、ボードインにつき研修した。慶応二年（一八六六）藩主に従い上洛中、明治天皇の御病気に際し参内した。これは西洋医学が宮中に入った最初であるという。明治二年（一八六九）医学校創立取調御用掛を拝命し、相良知安とともに医学設立に尽力した。当時の学制はすべて英米を模範とする傾向があったが、医学はドイツを範とすることを力説して、日本医学の基礎確立に功績を残した。その後宮内省の侍医を三十余年にわたってつとめ、明治四十年（一九〇七）男爵を授けられ華族に列せられた。

明治四十五年（一九一二）七十八歳で歿した。

89 書 幅

岩佐博氏贈

一幅

59 土肥慶蔵

医学博士。慶応二年（一八六六）福井藩家老本多家侍医石渡宗伯の二男として、福井県武生に生まれる。のち土肥淳朴の養子となる。号顎軒。明治四十年（一九〇七）東京帝国大学勅任教授となるも、大正十五年（一九二六）退職し、名誉教授の称号を授けられる。昭和三年（一九二八）私財を投じて日本性病

予防協会押上簡易診療院の診療を開始、わが国皮膚科学の鼻祖たることは、勿論、世界的権威である。

昭和六年（一九三一）六十六歳で歿した。

90 書 幅

土肥多起子氏蔵

一幅

60 八田善之進

明治十五年（一八八二）福井に生まれ、東京帝国大学医科大學を卒業、愛知県立医学専門学校教授をへて、大正八年宮内省に入り侍医を拝命、同十四年には日本大学医学部内科教授を兼任、昭和十一年侍医頭となって、同二十一年退官迄、常時側近に奉仕した。

侍医頭退任後、一時枢密顧問官に任ぜられ、その後は日大顧問、同名誉教授、社会保険中央病院々長などとして、最後まで第一線で活躍した。

昭和三十九年一月、八十二歳で歿したが、遺体は遺志に基づき、愛弟子達の手で解剖に付された。死後においても、なお医学に貢献しようとした博士の面目が躍如としている。

91 「博愛」二大字の扁額

八田善夫氏贈

一額

〔国学者〕

61 證誠寺東溟

名は善超、東溟と号す。天明五年（一七八五）京都に生まれる。大納言従一位今出川實種の子。二十二歳の時、今立郡横越村真宗山元派本山證誠寺の法統を継ぎ、和歌を加茂季鷹に学んだ。文化八年（一八一二）光格天皇より上人号を勅許せられ、小御所に参内して天顔を拝した。早くより尊王の心深く、広く天下の志士と交わったが、安政二年（一八五五）七月十三日七

十一歳で歿した。

92 和歌幅

宮下己代治氏贈 一幅

⑥2 橋 曙覧

清貧の中で国学と作歌に精進「万葉集」の歌風を慕い、近世末期の国学の精神に燃えて独自の新しい歌風をたてた一人である。

文化九年（一八一二）福井石場町（つくも一丁目）の紙商正玄五郎右衛門の長男として生まれ、幼名は五三郎、初め尚事、後曙覧と改めた。正玄家は北ノ庄時代から旧家として知られた木田橋家七屋敷の一つである。曙覧二歳の時、母鶴子が死亡したので、少年時代は府中（武生）の母の家で養われた。その後、日蓮宗妙泰寺明導に就き仏教を学び、後京都の児玉三郎の塾に入り漢学を学んだが、数月で家に呼び戻され、三国酒井清平の娘直子と結婚。家を異母弟宣に譲り、足羽山に隠棲（黄金舎）した。更に飛弾高山の国学者田中大秀に就き、大いに得る所があった。三十七歳の時、三ツ橋（照手三丁目）に移り、以後この家を藁屋と号した。曙覧の歌人としての業績は、ほとんどこの藁屋でなされ、のち松平慶永（春嶽）によって志濃夫廻舎と改められた。

慶応四年（一八六六）八月二十八日、五十七歳で歿した。

98 和歌幅

春 文 一幅

94 肖像画

河野菱渚筆（越智通兄）によるもので、武生市本保町、河野庄洲邸において実際に写生によって描写した曙覧晩年の肖像。曙覧はこの絵の出来栄を喜び「雪ならで、通はぬ峯の岩かげに神世のにはい吐く草の花」と讃歌を書いている。

寄託品

⑥3 伴 信友

安永四年（一七七五）若狭小浜藩士の家に生まれ、本居宣長の学風を継承し国学者として著名である。平田篤胤、橘守部、小山田与清と共に、天保の国学四大家と称され、歴史の研究、古典の考証にすぐれ、その正確、精密な研究法は国学者中最高の水準と評価されている。

著書三百余巻、集録した古典百五十余巻、校訂した古典二百六十余巻があり「長等の山風」「神名帳考証」「残桜記」など今日においても卓越した研究が少なくない。弘化三年（一八四六）に歿した。

95 和歌幅

宮下己代治氏贈 一幅

⑥4 東條義門

天明六年（一七八六）に若狭小浜に生まれた。若狭小浜妙玄寺住職。法名を靈傳と称した。

幼少より学問を好み、内外の典籍をひろく研究したが殊に国学者本居宣長の著書を愛尚し、その音韻、活語の分野を継承発展せしめ国語学者として大成した。彼の用語の活用と「てにをは」音韻の研究は、当時の国学者の間で重きを成しただけでなく、現在の国語学研究の上でも、忘れてはならないものである。天保十四年（一八四三）五十八歳で歿した。

96 東條義門著書類

玉の緒線分 五巻。山口栞 三巻。活語指南 二巻。指出 一括
廻磯、磯の洲崎一巻。 本館蔵

⑥5 福井の俳壇

97 南越獅子林分社相伝「文台・硯箱」 二点

松尾芭蕉の門人各務支考は獅子門と呼ばれる一派を創立して、多くの門人を教えたが、支考の孫弟子にあたる安田以哉坊は、更に獅子林分社と称する俳壇を構成、その俳統はやがて福井時雨庵祐阿に伝えられて、南越獅子分社が誕生した。

祐阿は通称大坂屋七左衛門といい、福井城下の商人で寛政十一年（一七九九）八十一歳で歿した俳人である。

なお俳諧では、今席の作法が定められ、一定の規格による文台が用いられたが、各派の家元はその俳統を伝える次期宗匠にたいして、必ずこの文台を授与して道統を明らかにするようになり、これをその派の俳諧精の象徴とした。

本展に出陳した文台及び硯箱は、南越獅子林分社の宗匠に相伝したもので、時雨庵祐阿の裏書がある。

98 明暮庵藤翠筆、俳句短冊。

五十嵐均平氏贈

一点
春 文

〔漢学者〕

⑥6 伊藤坦庵

名は宗恕、坦庵と号し通称ともした。父は京都に住み、豊臣秀吉に仕えた武士で、坦庵も京都で生まれた。

漢学を江村専斎に学び、曲直瀬玄理に入門して医学を修め、玄理の信任を得てその娘をめとったが、やがて漢学者を志し朱子学者として名声を博した。

福井四代藩主松平光通は、藩の儒官として坦庵を招き、藩士の教育にあたらせたが、讒訴するものがあつて三年間城内の一室に幽閉された。のち許されて京都に帰ったが、三年間一室にこもつて俗界からはなれ、学問に精進することができたのは、主君光通公のおかげであると語つたという。

伊藤仁斎と最も親密に交わり、宝永五年（一七〇八）八十六歳で歿した。

99 書 幅

春 文 一幅

⑥7 雨森炎洲

名は増質、炎洲と号し、通称を太郎兵衛といつた。代々福井藩に仕え二百五十石を領し、学問を好み詩文にたくみであつた。当時藩内随一の学者として知られ、その博学と敏才を称讃され、数々の逸話が伝えられている。

文化十一年（一八一四）七十六歳で歿した。

100 書 幅

「夏夕水樓」の詩

春 文 一幅

⑥8 力丸東山

祖先是結城家の家臣で初代藩主秀康と共に越前に来る。東山は福井に生まれ、京都に遊学して、伏原・那波魯堂などに入門、漢学を学び、更に和漢の兵法を研究した。京都白山町に青松塾を開いて、兵法を教え、門人を集めた。寛政の末頃（一八〇〇頃）福井に来て、再び藩士にとりたてられることを嘆願したが、ついに聞き入れられず帰京した。文化十二年（一八一五）に歿した。

101 書 幅

春 文 一幅

⑥9 井上翼章

宝暦三年（一七五三）福井藩士梯左仲太三胤の三男として生まれ、天明元年（一七八一）に井上満喬の養子となった。のち藩の右史総領となって藩の記録を校定することが多かった。翼章の著書で有名なものに、越藩史略、越前国名蹟考などがあり、その他著書多数がある。
文政三年（一八二〇）六十八歳で歿した。

102 和歌短冊

一点
春 文

⑦0 前田雲洞

延享三年（一七四六）に生まれる。名は潤、字は士河。曇川又瑞梅館の号がある。父友之進は朽木侯に仕え執政となり、京邸の留守を兼ねる。雲洞は其次子。のち福井藩の漢学者前田赤淵の嗣子となり、禄を継ぎ、明和七年（一七七〇）書院番に列せられ、藩主重富の侍読となる。文政二年（一八一九）五月、福井城下桜ノ馬場に初めて藩校正義堂を開き、その学政をつかさどり、毎月六回高野春華、清田僮叟等と出席し、経書を講じた。
天保三年（一八三二）十一月二十日、九十七歳で歿した。

103 書 幅

一幅
春 文

⑦1 前田梅洞

天明五年（一七八五）に生まれる。名は修、字は士業、通称彦次郎、華陽、漪園等の号がある。雲洞の庶長子となり、禄を継ぐ。
藩主齋善の侍読となり、詩文に巧みであった。また父の業を

継ぐ。

承けて桜馬場学舎を経営した。

安政三年（一八五六）七月十九日、七十二歳で歿した。

104 書 幅

一幅
春 文

⑦2 片山蘭女（九碗）

安政六年（一七七七）七月十二日、福井九十九橋南詰片山平三郎不白の子と生まれた。名は蘭、九碗と号した。
漢学を高野真齋に学び、京都に出て詩文を菊池五山に、書を僧無幻に学び、頼山陽・十時梅崖等と文雅の交わりをなし、三十六歳の時、梅辻春樵に嫁いだが、間もなく暇を請い、福井に帰り、のち江戸に出て文雅の士と交わった。
天保七年（一八三六）七月十二日、五十八歳で歿した。

105 書 幅

一幅
野路定吉氏贈

⑦3 高野春華

福井藩の儒者の家に生まれ、儒学者として藩に仕えた。嫡養子真齋に職を譲ったのちも、江戸の佐藤一斎・山本清溪・林述斎等に学び、諸名士と交遊した。春華は、書・兵法・武術・詩歌俳諧・音楽等の奥義を究め、特に福井の雅楽は春華より始まるといわれ、その名も広く知られていた。また、社会法を創設し、天保七年（一八三六）の大飢饉の際、たくわえた社会銭で飢餓人に粥を分け与えた。天保十年（一八三九）七十九歳で病歿した。

106 書 幅

「遊仙曲」の詩

一幅
春 文

⑦④ 高野真齋

天明八年（一七八八）福井藩士広部延康の次男として生まれ、享和三年（一八〇三）高野春華の養子となり、その家督を嗣いだ。天保十年（一八三九）に儒者見習となり、のち儒者かつ書院番となり近習に列した。安政二年（一八五五）藩が始めて学問所明道館を設置した時教授に任ぜられた。藩に仕える事五十五年、安政六年（一八五九）七十三歳で歿した。

107 三秀園扁額 一額
108 自筆遺稿類 四冊

真齋遺稿 一冊。真齋百詠 一冊。真齋道中詩歌 一冊。
真齋国詩 一冊。

本館蔵

⑦⑤ 林 毛川

勝山藩に仕え、藩政に携わった。藩医奏魯齋が藩主に学校設立を願ひ出、書數十筐と金百両を献じたので、毛川は魯齋をその任に当らしめ、藩校成器堂を創建した。また勝山文庫を建て、内外典籍を集め、弓馬鎗銃砲文武の教場を具備した。

勝山藩民は従来煙草を作つて生活していた。しかし悪徳商人が粗悪品をつくつて暴利を貪り、名産品の名が落ちるに及んだ。これを憂えた毛川は藩士水谷健十郎、木原佗作等に命じて、改革に乗り出し、再び勝山煙草の名が全国に広まった。また毛川のもとに來遊した人々に頼山陽、亀田綾瀬、野田笛浦等がある。安政五年（一八五八）五十八歳で病歿した。

109 遺 墨

一点
寄託品

⑦⑥ 花木澹齋

京都の人。皆川淇園の門人で、ひろく漢籍をきわめ、ことに周易論語に精通していた。儒者として福井藩に任え、七人扶持を給せられ、のち医を業とした。晩年住居を木田長慶寺のかたわらに設け、漢学を人々に教授した。
文久元年（一八六一）七十三歳で歿した。

110 書 翰 一通
春 文

⑦⑦ 蒔田雲處

越前の人。幼少より書画、詩作にすぐれ漢学者としても著名である。

始め越前で代官を勤めたが、中傷する者があつて職を辞し大阪・京・江戸を転住した。晩年足羽山に住み病のため右手の自由を失い、左手のみで墨竹を描いた。
慶応元年（一八六五）五十四歳で歿した。

111 墨竹の画並びに讚の幅 一幅
春 文

⑦⑧ 矢島立軒

矢島恕介、名は剛、立軒と号した。文政九年（一八二六）三月福井藩士矢島俊吉の次男に生まれる。

藩儒吉田悌藏に学ぶ。安政元年（一八五四）二十九歳の時、江戸に出て安積良齋の門に入る。安政三年（一八五六）四月、藩校明道館講究師となる。同年九月明道館幹事に、更に同四年明道館助教に昇進した。明治二年（一八六九）五月学制改革により明道館文学教授となり、翌年十二月職制改革により明新館一等教授となる。明治四年（一八七一）十月二十三日、四十六

歳で歿した。

112 松平慶永（春嶽）書翰

一幅

余、不肖ノ身ヲ以テ侍讀ヲ命ゼラル。帝鑑図説ノ御親讀、十八史略ノ講釋モテ天前ニ侍ス。近來、皇上精ヲ勵マシ。治ヲ圖リタマフ。御學日々増進セラル。臣等歎抃ノ至リニ堪エズ。

折々勅問アリ、篤鈍ヲ顧ミズ奏對セシメラル。余讀筵ニ侍リ、勅答ス。コレ余ガ力ニアラズ。汝ガ多年教示スルノ恩ナリ。コレ余汝ニ謝ス。

不宣

嘉平月十四日

（十二月）

正二位大学別当兼侍讀

源 慶永

立軒

七冊

113 矢島立軒朱筆書入「周易本義通釋」

本書は、支那、元の延祐三年（一三二六）、胡炳文が著述した周易の註釋書を享和二年（一八〇二）我国で刊行したものである。

もと福井藩の漢学者矢島立軒の蔵書で立軒と弟平格の手で極めて詳細な書入れが行われており、当時の学者の書物講読の有様が知られる。

平格の子轍の由緒書には立軒が他の蔵書とは区別してこの書を大切にすることが知られ、いかに心血をそそいだ朱注であったかがしのばれる。

以上 矢島かおり氏贈

79 柘植竹塙

三国に住み、名を浩、竹塙は号である。父は信州飯田の人で、

堀親広に仕え、柘植嘉平治といった。弘化四年（一八四七）より嘉永元年（一八四八）まで江戸にいて安井息軒に従い文学を修業し、また福井藩校に出入りした。安政二年（一八五五）三州新城學舎の教授になり、明治三年（一八七〇）より三国郷学教授を勤め、同五年学制改正により官立修斎学校大助教兼学区取締に任命されたが、翌六年事情があつて四十一歳で自害した。

114 画 幅

山水の画及び讃

一幅

宮下已代治氏贈

80 吉田東篁

福井藩の漢学者。名は篤、字は士行、東篁又は蒙齋と号し、別に江湖散人とも号す。

文化五年（一八〇八）に生まれ、幼名は金一のち悌藏と称した。

幼にして藩儒前田雲洞、清田丹藏に就て学び、また京都の鈴木撫泉に私淑し、浅見綱斎の遺化をうけ、刻苦勉強し、山崎闇斎派の学風を主唱し、その門下に橋本左内、由利公正、日下部太郎等多くの幕末の俊秀を輩出した。

明治八年（一八七五）六十八歳で歿した。

115 書 幅

寄託品

一幅

116 吉田東篁所用硯・煙草入

本館蔵

二点

81 広部鳥道

福井藩士。名は良知、初め淵黙と号し、のち鳥道と改めた。藩儒高野真齋に就いて漢学を学び、禅学をも究めた。福井に熊本

の横井小楠が招かれるや、徹夜で国事を論じあい互いに屈しなかつた。門下から日下部太郎など俊秀が続出し、明治十一年福井に広部私学校を創立、晩年京都に移り、本願寺大学林で漢学を教授、明治十四年京都に歿した。

117書 幅

春 文 一幅

⑧2 荒川汶水

福井藩士。幼少より学問を好み、福井藩儒者高野真斎に入門して漢学を学び、のち詩文を以って悠々自適の生活を送る。壮年にいたつて藩主に仕えて詩文を講じ、晩年、真宗大谷派の学校で教鞭をとつた。また福井城下に私塾を開いて漢学を教えた。明治十八年（一八八五年）に歿した。

118書 幅

春 文 一幅

⑧3 河野苳洲

丹生郡本保村の人。幼少より漢籍を読み、成人の後、詩文を作り、読まない本はないといわれるくらいに本を読んだという。また仏を信じ、常に念珠を手にして、僧にほどこしをし、村人はみな苳洲の徳を感じたという。

明治二十一年（一八八八）八十一歳で歿した。

119書 幅

春 文 一幅

⑧4 三国幽眠

儒学者。勤王の志士。

文化七年（一八一〇）十月一日、越前国三国で森与兵衛の三男として生まれる。幽眠はその号で、諱は直準、字は子繩、通称与吉郎と言つた。

はじめ近江国彦根在中川六郎のもとに学び、天保三年（一八三二）京都に出て、摩島松南に漢学を学び、天保七年（一八三六）京都に塾を開き、弟子を養成した。幽眠は儒学の中心として孝経を重んじ、「古註孝経」を著し、杉山篤信によつて光格上皇に奉られ、これが縁となつて天保九年（一八三八）鷹司家の儒者に任ぜられた。

將軍継嗣の問題が起るや、勤王攘夷の志士に参加し起ち上つた。安政五年（一八五八）大老井伊直弼に捕えられ、翌年中追放に処せられ、近江国石山に一時寓居したが、のち福井にもどり、明治二年（一八六九）議定鷹司輔濤の議事局扶に挙げられた。明治六年（一八七三）教部省が置かれた時、権大講義に補せられた。

明治二十九年（一八九六）五月三十日、八十七歳で歿した。

120書 幅

一幅

121 松平慶永（春嶽）より拝領の「書見台」

一基

描金梅花山雞の蒔絵。

122 「笑草」原本

一綴

安政の大獄で、橋本左内、頼三樹らと連坐した幽眠が入獄前から繫獄となつた顛末を記録した獄中日記である。

これには京都から江戸へ護送される様子や桃井伊織（橋本左内の変名）について訊問、牢内、拘留中の生活などが図解を入れながら克明に記録されている。その筆からは儒学者、詩文研究者としての高い学識を知ることができる。従つて単なる獄中日記ではなく格調ある詩歌が適所に折込まれ、幽眠をもつて初めて書ける日記である。

以上寄託品

⑧5 富田鷗波

天保七年（一八三六）に生まれる。幼少より読書を好み、福井藩儒高野真齋、花木澹齋の二人について漢学、詩文章を学んだ。安政五年（一八五八）藩が初めて藩校明道館をつくった時、助句読師に任ぜられた。翌六年には藩命により江戸の安積良齋、安井息軒、藤森天山、大橋訥庵、大沼枕山、鷲津毅堂等について学問を深めるかたわら、藩邸学問所において教育に携わった。のち国事に奔走し、明治以後学校教育に奉仕して、その功績は大きい。明治四十年（一九〇七）七十二歳で歿した。

123書 幅

一 幅
矢島かおり氏贈

〔洋学者〕

⑧6 佐々木長淳

福井藩士佐々木長恭の長男として天保元年（一八三〇）に生れ、家は神明神社の前にあつた。嘉永六年（一八五三）父歿し家督を相続し二百石を受けた。藩命により兵学を学び軍事にたづさわり、慶応三年松平春嶽の命によりアメリカに渡り、武器購入の交渉などに当る。

明治三年グリフィス博士の来福した時には博士の世話をした。明治新政府になってからは工部省に出仕し万国博覧会の世話をしたり、海外を視察したりして、特に養蚕関係の仕事に功績を残した。

大正五年（一九一六）八十七歳で歿した。

124書 翰

福田源三郎宛。大正二年（一九一三）一月。

一通

福田堅三氏贈

125佐々木長淳旧蔵洋書類

本館蔵

⑧7 日下部太郎

本名は八木八十八。弘化二年（一八四五）福井江戸町に生まれる。慶応元年（一八六五）藩命により、長崎で英学を修め、同三年二十三歳で福井藩最初の留学生として米国に渡った。米国ではニュージャーシー州のラトガース大学に入学し、明治三年（一八七〇）藩校明新館の理科学教師として招聘され来日したグリフィスに師事した。米国学生に負けることなく勉学し優等生の賞を受けたが、明治三年三月十三日、前途を惜しまれつつ卒業を目前にして二十六歳で客死した。

126日下部太郎旧蔵洋書類

一 括
グリフィス博士が明治四年（一八七一）福井藩校明新館の教師として招かれた際、米国より持参したラトガース大学の教科書類。

127関係出版物類

本館蔵
一 括
春 文

⑧8 W・E・グリフィス

一八四三年（天保十四）九月十七日、米国ペンシルヴァニア州フィラデルフィアに生まれた。一八六五年（慶応元）二十二歳でラトガース大学理科コースに入学。ラトガース・グラマー・スクールで横井兄弟を始めとする日本人学生と知り合い、また彼に日本行きを決意させる大きな要素となった留学生「日下部太郎」に個人教授をした。

その後、明治三年（一八七〇）二十七歳の時、福井藩校明新館に招かれて来日し、化学及び博物学の教師として一年間教授、福井の青少年に大きな感化を与えた。さらに大学南校及び東京開成校教師として三年間勤め、明治七年（一八七四）帰米した。日本近代化の黎明期に、鎖国政策とそれまでの閉鎖的傾向から脱皮しようとしていた明治維新の人心を覚醒し啓蒙した貢献

度は極めて大きかった。

帰国後は、牧師となり「The Mikado's Empire」(皇国)等の著述を発表し、日本紹介につとめた。

一九二八年(昭和三)八十六歳で歿す。

128書 翰

松平慶民宛、大正六年(一九一七)六月付。その他。

一括

129グリフィス博士著述類

以上二点春文

〔その他の学者・研究者〕

⑧9 瓜生 寅

天保十三年(一八四二)福井藩士多部五郎右衛門の長男として生まれる。

安政四年(一八五七)京都の蘭文医新宮涼庭に入門し蘭学を学び、長崎の米人フルベッキについて英学を学んだ。文久二年(一八六一)幕府が初めて英学校を長崎に開いた時、教授に抜擢されたが、のち帰藩して藩士に英語を教授し、横浜の英軍兵営に出入りして、その兵学を研究した。

明治三年(一八七〇)大学別当松平慶永(春嶽)に召されて東京に出、文部少教授などに任じて洋書の翻訳に従事していたが、同郷の岩佐純とともに学制取調掛十二人のうちに加えられる「学制」を起草、明治五年(一八七二)公布された。

同十年以降は実業界に入り、大正二年(一九一三)七十二歳で歿した。

130書 幅

春 文 一幅

⑨0 山崎 英常

山崎氏は、福井藩祖結城秀康に従って下総結城(茨城県)から越前へ入国した福井藩士であり、代々御書院番、御膳番、御普請奉行、札所奉行などを勤めた家柄である。

英常は、その八代目にあたり、享和二年(一八〇二)に生まれ、特に優れた学者ではなかったが、極めて筆まめで藩の諸記録、口碑伝承、実際の見聞等、細大もらさず書きとどめ、遂に弘化四年(一八四七)「続片聾記」も編集した。

続片聾記は、編年体の福井藩史であり、藩の動静、藩主藩士の日常、結婚、出産、死亡をはじめ、諸儀式の次第、天災、人災、犯罪など詳細に記された重要史料である。

英常は、その生涯をかけて続片聾記を増補する一方、多くの記録、文書、絵図などを書写して今日に残した。

また、幕末山崎家の一族には彼の気風を受けついで古記録の書写に熱心なものが多く、貴重な写本を今日に伝えたものも少なくない。

131 「続片聾記」 原本

八冊

本書は、福井藩士伊藤作右衛門が編修した編年体の福井藩史「片聾記」のあとをうけ、その遺漏を補い、「片聾記」が筆を置いている寛政四年以降の自藩の歴史を後代に伝えるとして、山崎英常が編修したものである。

序文には弘化二年(一八四五)完成とあるが、その後も補筆書継ぎがされている。

一括

132 山崎氏一族写本類
越藩諸士元祖由緒書。越藩転宅考。越前地理指南。福井城下絵図。その他

以上二件本館蔵

⑨1 福田源三郎

安政四年(一八五七)福井城下で、福田藤三郎の長男として

生まれた。家は代々福井藩主の扇子御用をつとめた扇製造業者であった。

山本木齋に詩文を学び、河津直入に国学及び歌道を習った。

特に歴史を好んだ彼は、明治十八年（一八八五）越前人物誌編纂に着手し、幾多の災害、財政的困難を克服して明治四十三年（一九一〇）完成出版させた。

大正十年（一九二一）六十五歳で歿した。

133 慶永公御行状記

一冊

郷土の先覚の事蹟に深い関心をもった福田源三郎が、松平慶永（春嶽）の少・青年時代の卓越した行状を記録した本書を十八歳の折書写したものである。

寄託品

〔書家〕

② 浅見海楼

福井藩士、書家として著名である。十代藩主松平宗矩に見いだされ、江戸の書家関思恭に入門を仰付られ、修行の後帰福、名声大いになり、揮毫を請うものが多かった。海楼はただ書のみならず、学問を好み伊藤錦里について漢学を修め、詩文をよくし、また小鼓にたくみで、謡曲にも通じていた。明和九年（一七七二）歿した。

134 遺墨巻軸

一卷

赤壁賦。行書体

春 文

③ 大島蓬洲

福井藩士の家に生まれ、藩の右筆（書記）であった。謡曲を嗜み、幼少より書を好み、長さ一尺五寸の大硯を用いて日夜修

行を怠らず、遂にその硯が磨滅して穴があいたという。蓬洲はいかに大字であっても、容易に位置をくずさなかったたので、世間では節用先生と呼んだ。明治十三年（一八八〇）に歿した。

135 書幅

一幅

行書体

宮下己代治氏贈

④ 大山陶齋

鯖江藩士青柳致敬の二男として生まれ、後大山柳塙の養嫡子となった。書道家であらゆる書体に通じていた。

明治三十一年（一八九八）七十八歳で歿す。

136 遺墨折本

一帖

隸書体

宮下己代治氏贈

137 遺墨折本

一帖

草書体

春 文

⑤ 青木龍峰

福井藩士。名は修、龍峯と号した。文政十一年（一八二八）福井に生まれ、鎗術、柔術、剣術、馬術、砲術など、一として通ぜぬものがなかった。

藩儒高野真齋について漢学を修め、のち江戸に出て、書道を正木龍眠に学び、福井藩書師に任ぜられた。維新後、文部省記録課、警保寮、内務省等に勤務したが、明治十七年以降、専ら書道を教授した。殊に篆書の大字を良くし、人々を驚倒させたと言う。

同四十二年（一九〇七）八十歳で歿した。

138 書 幅

行書体、「馨香」二大字。

一幅

139 遺墨折本

行書体。

高木多美氏贈
一帖

春 文

96 西脇吳石

明治十二年（一八七九）三月八日、福井県勝山町で生まれた。名は静、吳石は、その号である。成器小学校より福井師範学校に入り、卒業の翌年、習字の文検に合格し、福井高等女学校教諭となり、のち東京商科大学に出講、以後文化書道会を主宰して、書道の普及発展に努めた。

幕末の書家巻菱湖を継ぐ村田海石を師とし、更に日下部鳴鶴について書論を学び、漢詩にも秀れていた。

昭和四十二年（一九六七）十一月、勲四等を叙し、瑞宝章を賜わる。

昭和四十五年（一九七〇）十一月、九十二歳で歿し、更に従五位を追贈せられた。

140 書 額

五言二句書の扁額

一額

141 出版書類

吳石詩草（帙入・五冊）昭和三十五刊。三体千字文 全 一括
昭和四十五年十月刊。小倉百人一首 全 昭和四十五年十二月三版刊。満九十歳記念吳石詩書畫 昭和四十四年四月刊

以上西脇雲石氏贈

97 多田積斎

明治元年（一八六八）福井に生まれ、書道、国漢学の研鑽を

つみ、福井中学の教師となり、多数の子弟を育成した。

昭和十四年一月二十二日、七十一歳で歿した。

なお、俳人多田裕計氏は、その嗣子である。

142 書 幅

楷書体。昭和八年三月書。

一幅

多田裕計氏贈

〔画家〕

98 狩野元昭

福井藩の絵師狩野了之の嫡男として福井に生れた。幼少より父了之に学び、のち狩野法眼安信に入門し、第四代藩主松平光通に寵愛されたが、天保元年（一六八一）五十九歳にて歿した。

143 画 幅

虎に鐘馗の画。紙本。

一幅

春 文

99 狩野了章

福井藩絵師。狩野元昭の四男として生まれ、初め元昭、のち種信と改め、了章と号した。兄元英竹雲の病死により、元英の養子となって家を継ぐことを藩に願ひ出たが、六代藩主松平綱昌の病氣により、藩領は半減し、養子の願出は許可されなかった。このため浪人した了章は関東に行き、一時諏訪家、松平左兵衛督信平に仕えたが、幸運なく、再び浪人し、市中に出て画をかって生計をたてる一方狩野法眼永叔へ入門して画技を深めた。元禄七年（一六九四）七代藩主松平吉品により、再び福井藩に召抱えられ、これにより狩野家は再び栄え、了章を中興の祖とする。元文四年（一七三九）七十三歳で歿した。

144 屏 風

樹下群禽図。淡彩色。紙本。

宮下己代治氏贈

一 双

100 岡部南嶽

幼名は長十郎、内記、右膳、左膳とも称した。名は貞起、南嶽と号した。享保八年（一七二三）福井に生まれる。明和六年（一七六九）藩の家老職となり、千五百石の家督を相続した。書画を好んだが特に墨竹を描くのを得意とした。寛政十二年（一八〇〇）四月十九日江戸に於て六十八歳で歿した。福井乗国寺に葬られる。

145 画 幅

若竹の画。紙本。

春 文

一 幅

101 市川徳行

福井城下で福井藩士市川有右衛門光隆の子として生まれた。字は貫通、徳行、樵笛と号す。通称良右衛門。八石二人扶持金津の代官受込役で、性来画を好み、江戸にて狩野園陵に入門。常に写生画を研究し、特に鯉を描くにおいては、市川の鯉といわれるほど好評を得ていた。天保六年（一八三五）五月十七日歿した。

146 画 幅

鯉の画。紙本。

春 文

一 幅

102 中村西溪

寛政四年（一七九二）敦賀市谷口、造酒業井筒屋忠兵衛の二男として生まれた。西溪は号。十四歳の時、絵を学ぶため京都に出て松村景文に入門。花鳥を得意とし、特に虫類を描く妙手である。弘化二年（一八四五）に歿した。

147 画 幅

人物漫画の幅。紙本。

春 文

一 幅

103 明正寺竹叟

安政三年（一七七四）に生まれる。漢籍詩文及び書は父に学び、かたわら画をよくして、その名が高かった。また歌も学び、長崎、江戸にて書家などの文化人と交遊し、福井藩十四代藩主松平齋承の寵愛を受けた。その他間部詮勝等の諸代名とも交わり、悠々自適風雅のうちに、その生涯を終った。時に天保十一年（一八四〇）六十七歳。

148 画 幅

墨竹の画。紙本。

宮下己代治氏贈

一 幅

104 伊星叟岳

名は星喩、通称は源助、字は元詮。坂井郡丸岡藩士であるが、実は大崎太郎右衛門の子。幼少より画を好み、遂に藩の画師となった。弘化四年（一八四七）九月歿す。

149画 幅

小野玄信肖像。芳正讚。紙本。

春 文

一幅

105 今立春山

福井藩士。通称五郎大夫有慶。性来画を好み狩野興信の門に学び、のち狩野元信の画を慕ってその筆法を修行した。文化六年（一八〇九）に大御番となったのはじめ、文政二年（一八一九）に郡奉行、そのほか目付役・奉行役・浅姫君着帯用掛などを歴任、江戸霊岸島の藩中屋敷焼失にあたっては普請中用掛となった。安政二年（一八五五）歿した。

150二枚折屏風

鏡旭図。紙本。

宮下已代治氏贈

一点

106 高島夢蝶

通称は甚五左衛門、夢蝶と号し、別に悟則齋の号があった。家は福井藩居合の師範家であった。夢蝶は諸芸に達し、特に狂画は著名である。

151画 幅

人物戯画。紙本。

春 文

双幅

107 川地柯亭

名は義裕、通称は又兵衛、柯亭と号した。安永九年（一七八〇）福井に生まれ、弓術、馬術、鎗術、砲術、詩歌に通じ、且つ画法を紀竹堂、谷文晁等に学んだ。

154画 幅

山中桜花の画。絹本。

春 文

一幅

札所奉行、御纏頭、御先物頭等を歴任、藩主松平慶永（春嶽）の知遇尤も厚かった。

明治五年（一八七二）十月十七日、九十二歳で歿した。曹洞宗通安寺に葬られる。

152画 幅

山水の画。村田謙齋（村田氏寿の実父）讚。紙本。

寄託品

一幅

108 須子焦石

通称は孫作といい、焦石又は王岡と号す。鯖江藩士で、南宗派の山水を描くことに長じていた。

153画 幅

人物の画。絹本。

宮下已代治氏贈

一幅

109 石垣東山

敦賀の人、通称を東平と称した。京都に出て田中日華の門に入って絵を学び、円山派の絵をよくした。敦賀に帰り鞠山藩主酒井家に任えていたが、天保十二年（一八四〇）藩主が大阪玉造に定番勤務になったので、これに随従した。十四年に藩主は若年寄に昇任して江戸に赴任したが、東山は大阪にとどまり、絵を教授した。明治画壇の女流画家の跡見花溪女史も門人の一人であり、中西浄心、岸田文吉なども同門である。郷里敦賀にある時は柿谷半月に狂歌を学んだ。彼は無欲恬淡で、人に接して情誼が厚かったという。明治九年二月七十二歳で歿した。

⑩ 島田雪谷

名は広意、通称範左衛門又は多可摩、字は樗園、雪谷又は青涯等と号した。文政十一年（一八二八）に生れる。家は代々福井藩士で、雪谷は槍、剣、銃に通じ、また、書道・絵画にも才能を顕した。初め画を岩尾雪峯に、のち長州の南宗画家礪西涯に学び南北二派を兼修した。南画には青涯、北画には雪谷の号を用いた。藩主松平慶永、茂昭等の知遇を受け、遠近の門人千名を越すといわれた。

明治十七年（一八八四）一月二十九日、五十七歳で歿した。島田豊即ち墨仙画伯はその子である。

155画 幅

人物の画。紙本。

一幅

寄託品

⑪ 島田雪湖

本名甫、雪湖、雪附などと号した。福井藩士島田雪谷の長男として慶応元年（一八六五）生まれた。墨仙画伯の兄にあたる。はじめ弟墨仙と共に、福井に画塾を開いていたが、明治二十六年岡倉天心の招きで上京、美術学校で教鞭をとった。同三十四年、米国に渡りスタンフォード大学等で日本画を教授して名声を博し、自己の画域を大いに広めた。三十八年（一九〇五）日本美術学校の教授に就任のため帰国の途につき、同年十二月神戸港に帰着と同時に急死した。

156画 幅

月夜狼図の画。紙本。

一幅

寄託品

⑫ 島田墨仙

慶応三年（一八六七）福井に生れ、幼名を豊作といい、のち豊と改めた。幼時より甚だ絵を好み、はじめその父雪谷および橋本雅邦に師事したが、のち川崎千虎について学んだ。

明治三十六年に開催された内国勸業博覧会に出品した「大石主税刺鼠之図」で認められ、その後帝展に関係して、その委員となった。昭和十八年「山鹿素行先生」で帝国芸術院賞をうけた。ことに歴史人物画をよくし、その気品の高さをたかく評価されている。

昭和十八年七月六日、七十六歳で歿した。

157画 幅

加藤清正の画。絹本。

一幅

寄託品

⑬ 菱川師福

馬威しの絵で有名な画家。弘化二年（一八四五）神明神社近くに生まれ、橘曙覧に手習をうけたが、画は早瀬来山に学んだ。花鳥や仏画にも色彩の豊かな力作が数多く、昭和十六年（一九四一）九十七歳で歿するまで描き続けた。日ノ出中町に住んでいたが、晩年娘の画家琴房と共に名古屋に移り不遇の中に終った。

158画 幅

福井藩安政時代着色馬威之図。昭和九年製作。絹本。

双幅

馬威は、江戸時代福井藩で行われた、勇壯無比の珍らしい年中行事である。

福井城下では、毎年正月はじめ、各町ごとに松の木を立て、これに伊勢神宮の御祓札や日の丸扇子などを飾りつけ、左義長と称し、正月十五日に至って、燃やすのが例であった。

馬威とは、この左義長を利用し、正月十四日黒紋付に纏懸

けといった定式の服装の青年藩士が、騎馬で左義長を一巡したのち、所定の道順（大体現在の本町通り）を走り抜け、それを町、農家の若者が鉦・太鼓を打鳴らしつつ攻めふさぎ、両者の間に壮絶な競合いが展開されたもので、藩士の馬術練磨、軍馬の鍛錬を目的とした調馬訓練に庶民も参加するとう、士民融合の一大行事である。

越前馬威の名は、樂翁松平定信の著書や、烈公德川齊昭が福井十六代藩主松平春嶽へ示教した九箇条の君主の心得書等にも紹介推奨され、歴代藩主の尚武の気風とあいまって、当時全国に鳴響っていた。

寄託品

⑩ 平林清輝

画家。菱川師福の子として（平林は実母の姓）明治二十一年（一八八八）十月二十五日生れる。昭和三十八年（一九六三）九月一日歿。西尾琴房とは異母兄妹。

159画 幅

聖徳太子の画。絹本。

平林末子氏贈

一幅

⑪ 成見如山

福井藩士で、毛矢町に生まれる。画を谷口靄山に学んで、山水を得意とした。また、肺病にかかり、その治療法として盆栽を嗜んだ。

明治十七年（一八八四）歿した。

161画 幅

山水の画。紙本。

宮下己代治氏贈

一幅

⑫ 早瀬来山

幼名を獻橋、のち鴻と改めた。初め晚翠、歟僊、二石斎等と号したが、晩年来山に改めた。文化五年（一八〇八）福井に生まれ、画を松村景文、岡本豊彦等に学んだ。豊彦は、彼の非凡の画才を愛し嗣子にしようとしたが、病弱の故を以って之を辞退した。明治二十三年（一八九〇）二月五日八十三歳で歿した。福井真宗大谷派称念寺に葬られる。

162画 幅

人物の画。紙本。

春文

一幅

⑬ 西尾土崩

明治二十八年（一八九五）六月四日、父西尾儀平（即ち菱川師福）母やなの二女として福井に生まれる。幼少より絵画をよくし、生涯画道一筋に生き抜いた。

昭和二十八年（一九五三）五十九歳で歿した。

160画 額

牡丹の図。絹本。

豊島初音氏贈

一額

⑭ 河野菱者

弘化元年（一八四四）丹生郡本保村に生まれた。名は通兄、通称は條左衛門、菱渚または半湖と号した。南宗画を父通香に学び、明治二十三年京都画学校の教授となる。

明治三十三年（一九〇〇）歿した。

163画 帖

二帖

謎語淡彩画。紙本。

宮下己代治氏贈

⑪ 山田介堂

通称己三郎、介堂はその雅号である。丸岡町に生まれ、幼くして絵を好み、長じて京都に出て、播州明石の細谷玄斎の門に入り、熱心に画法を研究、玄斎の歿後は、富岡鉄斎について南画を習得した。鉄斎が門弟同様にして指導した画家は、介堂と独山和尚の二人きりである。一方、介堂は外交的手腕もあり、明治、大正の画壇では相当認められたが、大正十四年五十八歳の時京都で歿した。

164画 幅

山水の画。山田介堂画讃。紙本。

一幅

宮下己代治氏贈

⑫ 内海吉堂

嘉永元年（一八四八）敦賀一向堂に生まれ、日本画を学ぶ。壮年時代、号を海後と称したが、晩年吉堂と改めた。

特に鯉を描くのが得意であった。のち日本画から南宗画に転向し、長田雲堂、山田介堂とともに南宗画の福井三堂の一人に数えられている。

大正十四年（一九二五）七十八歳で歿した。

165画 幅

魚鳥の図。紙本。

一幅

宮下己代治氏贈

⑬ 長田雲堂

嘉永二年（一八四九）丸岡町に生まれ、幼くして孤児となつ

たが、性来書画を好み、十五歳の折、京都に出、山中静逸の門に入り南画、特に蘭竹の描法を学び、その後は、更に日野對山や中西耕石について南宗画を習得したといわれる。福井三堂の一人に数えられ、終生研鑽怠らず大正十二年（一九二三）東京の自邸で七十四歳で歿した。

166画 幅

山水の画。絹本。

一幅

宮下己代治氏贈

⑭ 悟雪洞大機

郷土画家。本名は山本増次郎。大機・永暉と号した。慶応元年（一八六五）に生まれ、現在の本町加州銀行のあたりで本業として奴屋（折財布・袋物）を営んでいた。昭和二十七年（一九五二）二月十二日、手寄町にて八十八歳で歿す。

昭和十六年五月刊行「稿本福井市史」扉の福井城絵図は彼によるものである。

168画 額

富士の画。絹本扁額。

一額

宮下己代治氏贈

⑮ 吉田文山

日本画家。明治九年（一八七六）福井市北四ツ居に吉田助右衛門の長男として生まれ、名を衡ひらといった。小さい時から絵を好み、小学生時代には、島田雪湖、墨仙兄弟の画塾に通った。明治二十九年（一八九八）東京美術学校に入学、当時の校長は岡倉天心であった。

美術学校卒業後、フランスに留学せんがため、東京外語のフ

ランス語科に入学したが、父の急死、日露戦争勃発などのため、渡仏は実現しなかった。その後明治三十九年に大野中学に奉職、同四十三年に福井中学に転勤になり、昭和十一年に退職するまで二十七年間の長きにわたり教壇に立った。退職後も絵筆を離さなかった。昭和三十六年、八十六歳で歿した。

168画 額

布袋像画。紙本。

宮下己代治氏贈

一額

⑫④ 森由太郎

明治三十四年（一九〇一）十月十五日、坂井郡丸岡町に生まれる。

大正十年（一九二一）福井師範一部を卒業し、大正十二年（一九二三）文検（西洋画科）に合格、その後、福井商業学校教諭、県立武生中学校教諭を勤め、昭和十年（一九三五）二科展に初入選、同二十三年（一九四八）福井第一（藤島）高等学校教諭、同二十五年（一九五〇）二科展特選、翌年二科会々友に推挙され、同二十七年、県教委より教育功労者として表彰され、同三十年（一九五五）一陽会創立会員となる。また同三十七年（一九六二）福井県文化賞受賞、同四十年（一九六五）仁愛女子短期大学教授となる。

同四十四年（一九六九）六十八歳で歿した。

169画 額

松井節部隊汾陽入城の図。油絵。

徳橋仙之助氏贈

一額

〔商家〕

⑫⑤ 金屋家

金屋家は、同家の系図によれば、はじめ北ノ庄氏を称し、室町

時代初頭より福井にあつて朝倉氏に仕えていたという。

七代吉正（弥助）の時、金屋と名乗り「鉄剣萬物諸商」業をはじめ、福井藩祖結城秀康の北の庄築城に協力、御用商人に取り立てられた。以後、代々福井藩の御用をつとめ、苗字帯刀を許され、福井城下のほか三国、鯖江などにも多くの出店を持ち、のちには京都にも支店を営業するなど豪商として全国に聞こえた。

四代藩主光通の時、当主七兵衛吉広は我国最初の福井藩寛文札の元締となり、足羽山の一面に別荘地を与えられている。

藩に多くの御用金を収め、上方の名商角倉家と婚姻を結び、紀州家など、他国の大名へも貸付けを行うなど江戸中期頃全盛をきわめたが、のち次第に衰微した。

170 金屋家文書

福井藩藩札。金屋健次郎宛福井藩給禄朱印状。金屋家由緒書及び調達金調書。大成武鑑。撰津大坂図。寶永東京絵図等。

寄託品

〔工芸〕

⑫⑥ (刀工)

下坂康継

通称下坂市左衛門といい、近江国坂田郡下坂村の人。父祖の代から刀鍛冶を業としていた。慶長五年（一六〇〇）関ヶ原の役後福井藩祖結城秀康が越前に入るや、康継を合力米四十石をもってお抱え刀鍛冶とした。

慶長十一年、二年頃に家康及び秀忠の両將軍に召し出され、江戸において鍛錬し、その結果家康から「康」の字を賜わり、名を康継と改めた。

また、自作の刀の中子に葵紋を切ることを許され、五十人扶持を受けて侍同様に取立てられ、江戸と越前を往復しつつ両地で仕事をした。

康継の鍛えた刀は、新刀随一の切味と称され、大業物として

名高い。

元和七年（一六二一）歿し、福井城下桂林寺に葬られ、現在は同寺跡の宝永二丁目五輪塔が復元されている。

171脇差

銘（表）南蛮鉄於武州江戸。（裏）越前康継（初代康継）。一尺一寸一分。

春文

172刀

銘（表）葵紋。康継以南蛮鉄（裏）於武州江戸。二尺三寸五分。

寄託品

⑫ 藤原包則

173槍

銘 越前住 筑後守藤原包則

一振

この槍は、鞘に浄光院様御代のものとして記されている。浄光院は、福井藩々祖結城秀康公の法号である。一尺一寸六分。

寄託品

⑬ 藤原兼植

174雑刀

銘 越前国住兼植。長さ二尺九寸三分。刃長一尺三寸六分。

一振

T・F・ハイランド氏寄贈

(甲冑工)

⑭ 明珍吉久

古来甲冑師として名高い明珍家は平安時代末期から鎌倉時代

初期に活躍した増田宗介が初代である。宗介は十二世紀中頃近衛天皇からその作品が玉のように明るく輝き見事な珍品であるとして「明珍」という姓を賜わったと伝える。その後、この明珍家は室町時代中期の全盛期から明治に至るまで多くの名工を生んだ。但し江戸時代に入って甲冑の需要が減ると、刀や鐙、置物などをも製作するようになる。明珍吉久は通称小左衛門といい、明珍一派の一支流である。代々、小左衛門吉久と名乗って、福井藩に仕え、市内春山二丁目のあたりに住み、藩主の命で鐙・鐙その他の鉄製品を作った。殊に二代目吉久（延宝二年、一六七四、歿）は、ここに展示する鐙をはじめ現在イギリスの博物館に保存されている驚の置物、松平家が明治天皇に献上した龍の置物等傑作が多く世界的に知られた名工であった。また六代目吉久（文化六年、一八〇九、歿）は、また小左衛門と人々に嘲られたが、鐙を彫っては随一と賞讃されたと言う。

175魚鱗具足

一領

176海老香炉

一点

以上寄託品

(鐙工)

⑮ 高橋記内

福井藩の鐙師。松屋町に住み、本姓石川、のち高橋と改めた。

ある時、蛇の鐙を作り見事の出来であったので、藩侯が江戸出府中、某侯が脇指のその鐙を見て、この蛇は動いて柄頭まで這歩くようだと言ったとほめたという。

元禄九年（一六九六）に歿した。

177松平慶永（春嶽）の佩刀鐙。

二点

鉄無地耳通シ角繫金銀三日月象眼、「銘 越州住明珍吉久作」「象眼記内作」

春文

(彫刻)

⑬ 島 雪齋

彫刻師。大工職島清治郎の三男として三国下西町に生まれた。十一歳の時、当地の彫刻師志摩龍造の門に学ぶ。後に加賀国大野の彫刻師弁吉に、また三国に来ていた長崎の篆刻師石齋について学び、石齋より齋の字を授けられ「雪齋」と号した。松平春嶽の知遇を受け御用職人となり、天皇、将軍、伊達宗城、山内容堂等の諸侯、文化人、由利公正、中根雪江等の福井藩士などにも作品を献上している。

三国の惣社桜谷神社奉納神馬、桜谷神社境内の木立神社の御神体松平春嶽像も雪齋の作である。またオーストリア万国博覧会へ野鳥の置物を出品し一等賞を得ている。

明治十二年(一八七九)六十歳にて病歿した。

178 松平慶永(春嶽)所用、文具等小物類。

一括
春 文

⑭ 沼田一雅

彫刻家。明治六年(一八七三)福井の木田新町で生まれ、幼名を勇次郎という。

明治二十四年(一八九一)彫刻修業のため上京し、竹内久一に師事し木彫を学ぶ。明治二十九年(一八九六)東京美術学校助教授となる。明治三十六年フランスへ留学し、陶器製法等を研究。明治三十八年に大彫刻家ロダンの師事し、フランス政府から芸術章(アカデミー・ド・オフィシエ)を昭和三年(一九二八)フランス勲章(レジオン・ド・ヌール)を贈られ、昭和二十九年(一九五四)日本芸術院恩賜賞を受ける。作品「正木直彦氏陶像」が有名である。

昭和二十九年(一九五四)八十二歳で歿した。

179 三島釉象香炉

一点

沼田喜代子氏贈

(篆刻)

⑬ 河崎致高

通称三郎助、家は越前藩士であった。松平慶永(春嶽)の寵を得、和歌を善くし、特に篆刻(印を彫ること)に巧みであった。藩の「修武局」「図書寮」「明新館図書記」等の印章、また松平慶永、茂昭、中根雪江、横井小楠、秋月種樹等の落款印を彫った。明治二年(一八六九)十月十五日、歿した。

180 福井藩校蔵書印。

印文「明新館図書記」。

一点
本館蔵

181 松平慶永(春嶽)所用落款印。

印文「明德惟馨」「春嶽」「源 慶永 字 公寧」

二点
春 文

(紙漉)

⑭ 岩野茂山

今立町大滝(五箇村)大滝・岩本・新在家・定友・不老の一人。明治十一年(一八七八)七月三十日、藤之助、まぢ夫妻の子として生まれた。清慎校(小学校・旧成願寺)に入り、卒業後高等科に進んだが、二年で退学。「共愛舎」という夜字に通う。

父藤之助も紙漉きをしていたので、そのかたわらで仕事を手伝い、その後定友の西野彌平次に見込まれ修業した。以後紙漉き一筋に生き、古来の手法に加えて、古法を活用した幾多の新しい加工紙を発明工夫し、五箇の越前和紙を新時代へと脱皮させると共に和紙の名を世界にとどろかせ、福井県無形文化財の指定を受けた。

指定を受けた打雲・飛雲・水玉の他、雲華・東風・宮城野・飛龍・七夕・鳥の子・墨流し・檀紙、また方三間もある早稲田大学図書館壁面用紙等多種多様の紙を漉いた。

尚、出でては村長、製紙工業組合長を勤め昭和三十八年（一九六三）八月十日、八十六歳で歿した。

182書 幅

俳句。昭和三十六年書。

一幅

183作 品

山田誠一氏贈 一括

越前和紙

わが国製紙の歴史の中に越前の国名が現われるのは奈良時代である。越前和紙生産の中心地は、伝統の古き、生産実績、種類の豊富さ、紙質の上から、今立郡旧岡本村、現在の今立町を筆頭に挙げなければならない。岡本村の紙漉きは、大滝、岩本、新在家、定友、不老の五箇村から成立しており、その名声は全国に高く鳴響いていた。通常越前和紙と呼ぶのは五箇村の奉書・鳥の子紙であり、特に奉書は諸国奉書中の最優秀なものとされ、また和紙の中で上品なもの筆頭に推されていた。五箇村の製紙は代々の為政者によって種々の保護を加えられ、江戸時代、福井藩主結城秀康は五箇村紙屋中に奉書・鳥の子・長高・正宗等の抄造に対する独占権を与えている。

また一方、朝廷・幕府・諸大名・公家・社寺等の御用紙ともなつて、奉書類の商品化が進み他国移出が増加して来ると、藩は元禄十二年（一六九九）紙会所を設置し判元制をしき、漉紙の統制を計り運上の確保に努めた。鳥の子紙の漉立は藩の許可を必要とし、御用紙は詔物で、市販の奉書は町物と呼び、原料、漉方すべて精粗の差があった。維新後、社会の進展につれて和紙も旧態を保持し得ず、五箇村では幾多の苦難と工夫を経て、現在では手漉和紙に局紙・

奉書・檀紙・鳥の子・美術紙・書画紙などを、機械漉和紙として、局紙・包装紙・襖紙・壁紙・印刷用紙などを漉いている。

檀紙

歴史が古く、奈良時代から存する。古来陸奥の名産で平安時代から有名であったが、鎌倉時代を経て室町時代に入る頃にはその盛名もさびれ、名産地は讃岐に移り、更に備中に移った。

檀の木を材料として製した紙で、厚くて大きく、皺があるのが特徴。大高檀紙・小高檀紙の別があり（今日我々の見る大鷹・小鷹檀紙は、この変名）、大高檀紙は縦一尺七寸余、横二尺二寸余で、皺も高く大きい。小高檀紙はそれよりやや小さい。公家文書や朱印状、諸芸の免許状に用いられた。

皺の細かい強紙も檀紙の一種で、また下文や御教書に用いられた引合も檀紙で、皺のないものもある。

尚、大きさは時代によって相違があり、例えば元禄の大きさは、現代の大奉書より縦横二寸ずつ大きい。

墨流し

模様染めの一方法。平安時代から有り、当初は墨一色を使った。後世は墨と藍の二色となり、更に紅を加えて三色となった。

染めるには、水の上に絵の具と樹脂との混合液を落し、浮かせたままこれを動かし流れ模様にしておき、その上に奉書のような吸い易い紙を平らに乗せる。すると紙がそれを吸い取って模様染めができる。この技術は昭和三十四年（一九五九）県無形文化財に指定されている。

飛雲

打雲のように雲形を連続させないで、銭貨大の青雲を

点々と表わしたものを。

藍と紫の紙汁をひ杓でくみ、漉きたてた襖五枚張りの紙の上に、それを落として雲形の斑を作った。しかし、岩野茂山は、これを襖一枚判にし、そのうえ雲紙の藍や紫を手先でふりかける方法を使った。更に竹箒の竹を五・六本に束ねて、これで紙汁をふりかけ小飛雲を作った。

岡大紙

大正十四年（一九二五）早稲田大学図書館から壁画用画紙の製作を依頼され、岩野茂山が苦心して作った紙である。

楮四分、雁皮三分、麻三分を配合して漉いたもので、大きき三間四方、目方が十一・二キログラムもある世界最大の紙。

この紙は、早稲田大学で「岡大紙」と名づけられ、絵は横山大観、下村観山による。曹洞宗本山永平寺にも納められ、実大そのままを使用し、永平寺全図が作画されている。

岩野平三郎氏贈

昭和47年10月発行

創立20周年記念特別典

郷土の人脈

解説総目録

編修 福井市立郷土歴史博物館
印刷 創文堂印刷株式会社

主催 福井市教育委員会
会場 福井市立郷土歴史博物館

昭和47年10月

福井市立郷土歴史博物館編